

平泉雜記

三四五

和書門			
二	二	二	二
九	九	九	九
一	一	一	一
三	三	三	三
七	七	七	七
一	一	一	一
冊	架	函	號

內閣文庫			
七	二	二	二
五	九	九	九
函	一	一	一
架	冊	號	類



地八六

共二

內閣文庫			
番號	和	29195	
冊數	2 ( 2 )		
函號	175	25	



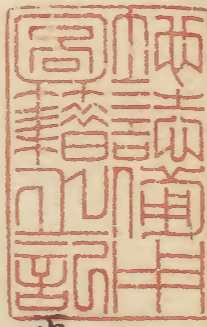
圖  
80



中野寺銅鐘  
 神領  
 辨領  
 再新堂  
 產湯水  
 漆方五  
 金色堂三代作  
 又

奥大郡  
 摩多羅神  
 國術塚  
 辨度大般若殿  
 光隆代太刀  
 常盤之墓  
 又

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十



一〇九七〇號

平泉雜記卷之二

中尊寺銅鐘

奧六郡

押領使

摩多羅神

辨鎌倉實記

國衛塚

耳輪堂

辨慶納大般若經

産湯水

光堂三代太刀

漆万盃

常盤之墓

金色堂三代棺

光堂物語

又

又

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

三條吉次	七	炭燒藤太石碑	并引六
義經之古館	九	力士之塚	辛
常陸坊海尊	二	家老館	三
花楯城	三	神樂岡	四
羽黑山大堂	五	長命山城	六
北條九代記頼朝奥入	七		八
田村將軍建立堂社	八		九
大將軍	九	辨慶石	十
基衡之室	十一		十二

平泉雜記卷之三

中尊寺銅鐘

今中尊寺ニ在ル處ノ鐘ハ七十九代ノ帝光明帝ノ御宇康  
 永二年癸未歲ニ造レリ秀衡ノ時ノ鐘ニハアテス此山五  
 十四代仁明帝ノ嘉祥三庚午歲慈覺太師ノ開闢ニメ其後  
 二百五十六年ヲ過テ七十三代堀河帝ノ長治三年乙酉ノ  
 春堀河鳥羽兩帝ノ勅詔ヲ蒙リ鎮守府將軍藤原清衡寺院  
 佛像ヲ建立ス其後二百三十三年ヲ歷テ建武四年丁丑歲  
 光明帝ノ曆号也南朝後醍醐  
 帝ノ延元二年ニアタル 堂社寺塔回祿ノ殘レルモノ

少シ此年ヨリ七年後ニ賴榮法師此鐘ヲ鑄テ序銘ヲ書リ  
此人清衡ノ再興造立ノ年曆ヲ去ルノ遠カラサル故ニ序  
中ニ著ス處ノ山ノ由来是ヲ徵ト為スベシ賴榮ハ金色堂  
ノ別當ナリト云其後何年ノ頃ヨリカ此金色堂妻帯ノ竹  
下坊司トリシニ延寶四年ノ秋時ノ任持清僧ノ願有テ本  
寺東叡山ニ其旨ヲ言上シ則免許ヲ蒙リテ永世清僧ノ寺  
トハ為セリ

鐘銘序  
仰考平泉中尊寺草創歲序長治二年春藤原清衡公忝賜  
堀河鳥羽勅詔靈場也爰建武四年回祿成阿闍塊塼賴榮

勵推鐘利主志干茲誌

關山曉鐘 覺無明眠 鷲嶺晚嵐 拂煩惱塵  
推伏魑魅 感降靈仙 悉拯六道 下達九泉  
劔輪輟苦 鯨音無邊 普配聖賢 四化父母  
利物心堅 鑄施金錢 銘加鏤字 永不朽傳

康永二年大歲癸未七月日

鑄師散位藤原助信  
願主權律師賴榮  
大檀那近將監平親家  
大檀那當國大將沙彌義慶

鐘長四尺壹寸程口徑二尺三寸厚三寸

奥六郡

奥六郡ト云ハ陸奥州ノ内膳澤江刺和賀稗拔志和岩手也  
清衡是ヲ領スル一東鑑卷之九ニ見エタリ膳澤ヲ俗ニ伊澤  
ニ作ル和賀續日本紀ニ和我ニ作ル東鑑ニ加賀ニ作ル拾  
菝抄ニ知我ニ作り或ハ知賀ニ作レルモノアリ皆誤ナリ  
江刺ヲ東鑑ニ柄著差ト書ル所アリ是字假名ヲ以テ書リ  
又節用集ニ江差ト書テ江刺ト二郡トス是文字ノ異ナラ  
以テ誤レリ江刺一郡ト為スヘシ拾菝抄ニ誤テ江判ニ作ル  
稗拔或ハ拔ヲ枝ニ作ル東鑑ニ誤テ部貫ニ作ル又節用集ニ

誤テ稗繼ト書リ今稗貫ト書ス志和拾菝抄ニ斯波ニ作り  
續日本紀ニ子和ニ作ル源順和名鈔ニ標葉ニ作り又紫和  
ト書ケルモアリ岩手或ハ岩提ト書ケルモアリ  
或說ニ東鑑ニ加賀ト書ルハ加美郡ノ誤ナルヘシト云リ  
愚按スニ此說誤ニ同書ノ末ニ和賀ノ丁ノ出タルヲ以テ  
證トスヘシ況ヤ北方岩手ヨリ志和稗貫膳澤江刺ノ六郡  
連續ノ中和賀一郡ヲ除キテ遙三四日ノ行程ヲ隔タル  
加美一郡ヲ交ヘ加フヘキニ非ズ此說僻ナリ  
此六郡ハ安倍忠賴以來賴時貞任マテ傳領シ其後清原真  
人武則領知シ其子荒川太郎武貞其子真衡其子海道小

芸叢本ニ云  
一ニ不帰又武貞カ子  
ノ武衛家衡ハ異種  
同母ノ弟トニ云  
六ハ清衡ハ武貞カ子  
アリタルノ分明也

太郎成衡戦死ノ後清衡領之基衡秀衡泰衡續テ領之  
東鑑卷九云清衡繼父荒川太郎武貞卒去後傳領奥六郡ト  
然ルニ前太平記等ニハ清衡ハ武則ニ養ハレ子也武貞ヲ  
兄ト為スト云リ五代一覽ニモ西説ヲ奉テニニ不帰又武  
貞カ子ニ非サルト分明也清衡幼キ時武則ニ養ハルト雖  
成長ノ後養父ノ姓ヲ不冒ノ本姓ニ復スルト明ニ履歷ニ  
アラハル成衡戦死ノ後奥六郡ハ官地ニ収メラレ義家將  
軍執奏ニ依テ清衡ニハ禁裡ヨリ下シ賜リタルナリ或説  
ニ清原ノ家ヲ繼テ奥六郡ヲ傳領スルト云ハ誤也

押領使

三

押領使ハ國ニ奸盜等ノ人アル時平ケル職也トソ鎌倉  
實記ニ云當時日本ノ三押領使ハ一ハ奥州ノ秀衡一ハ伊豆  
ノ祐親一ハ肥後ノ菊池ナリ一國ノ政務ハ國司ノ主ル所  
ナリ若シ兵馬ノ了ハ國司ヘ不及尋押領使心ノ儘ニ振廻  
也今度翔落ノ法師ナント探ス者ハ小事ニ目代ノ役ナリ  
○朝野群載ニ押領使ノ太政官符アリ左ニ載テ備考  
太政官符ハ出雲國司  
應以清瀧靜平為押領使令追捕部内奸盜輩事  
右得彼國去正月廿六日觸狀備謹檢案内美作伯耆等國  
宜符押領使勤行警固而此國在二境之中暴惡之輩任心

横行自非官符之使何糾執惡之徒加以年來之間賦稅之  
民恣集黨類動奪人物按事情糾捕□之道尤有<sup>其</sup>此使方今  
靜平才□備亦堪武藝清廉之性勤公在心望請<sup>廣</sup>官裁準  
件等國例以靜平致裁□押領使且令折凶惡之輩且令有  
平善之風者右大臣宜依請者國宜承知依宣行之符致奉  
行

從四位下行左中辨橘朝臣好古左大史出雲宿禰蔭時  
可成談云押領使ト云トハ俗ニ云押領ト云詞ニテナシ其  
地ヲ勅賜ナクテ押テ領スル人ト解スルハ誤ニサラハ  
何トテ使ノ字付タル奥羽軍記ノ和文ニハ陣頭ト有漢文

ニハ押領使ト有國々ヨリ公役ニテ出ル軍兵ヲ召連テ出  
ル將ノ丁也押ノ字ノ意ハカ、ミル丁也

其中ニ摩多羅神<sup>四</sup>或書ニ斑神ト即林出<sup>或書ニ斑神ト即林出</sup>

或人問摩多羅神ハ平泉ノ鎮守也何レノ神ナルニヤ答曰  
羅山翁ノ神社考ヲ讀テ其由来ヲ知ル神社考ニ山家要略  
ヲ援曰傳教大師佛法ヲ求メント思フノ願アリテ葛城ノ  
神ニ詣テ、祈リケルニ神傳教大師ニ告玉ハクは大願ニノ我カ  
ニ不及處ニ天神地祇ヲ祈ルヘシ但シ三輪大明神ハ我國  
ノ地主ニノ天竺唐土ニモ亦此神ヲ崇ムカシユニ詣テ祈  
ルヘシト告玉フ其後傳教大師叡山ニ歸レリ山ニ三光ノ



光ヲ認ムル所アリ行テ是ヲ見レハ杉ノ大樹ナリ其後入  
唐ノ志ヲ遂ケ唐土天台山青龍寺ニ至ル其鎮守ヲ摩多羅  
神ト云又金毗羅神トモ云リ大師此神ハ何レノ神ナルコトヲ  
尋ヌレハ三輪金光ト申奉ル神也ト答フ於是大師初日本  
ニ在リシ日叡山ノ三光ハ此摩多羅神ナルコトヲ喻リ又求  
法ノ願成就シテ日本歸國ノ後叡山ノ三光ノ所ニ神社ヲ  
建ツ是則日吉大宮也昔靈鷲山ニ於テ十二神ヲ祭り玉フ  
其中ニ金毘羅神アリ是則我朝ノ三輪大明神也弘法大師  
上下ノ醍醐ニ建立スル清瀧明神慈覺大師西坂ニ立ル赤山  
権現智證大師三井寺ニ立ル新羅明神何レモ入唐ノ時祈ル

處ノ天台山青龍寺ノ鎮守ニノ乃チ素盞鳴尊ノ父子ノ御  
神也ト云リ詳ナルコトハ神社考ニ出タリ

辨鎌倉實記 五

近世梓行ノ鎌倉實記ニ日本源義行ト云者金國へ渡リ  
タルト云説金史別本ニアルヲ以テ是ヲ牽合セシカ為  
ニ許多ノ偽言ヲ設ク今金史ノ文ヲ國字ト為シ左載テ  
示之童蒙詳ナルコトハ本書ニ於テ可考之也又正史ニ齟  
齬シテ紫朱ヲ混乱スル者ヲ辨ジテ之ヲ後ニ附ス  
金史列將傳曰範車國ノ大將軍源光録義鎮ト云ル人ハ父ハ  
日本陸華仙ト云所ノ權冠者義行ト云シ人也義鎮始メ新

靺鞨部ニ入テ千戸邦判事ノ宦ニノボル身長六尺七寸生  
ツキ温和ニノ勇猛才思諸部ニ甲タリ外夷ヲ多ク隨ヘタリ  
拜シテ学館ニ入禮儀ヲ辨ス後ニ咸京録事官ニ遷ル金ノ  
二代目章宗日本鳥羽院文治四年ノ頃章宗元年也詔シテ光録大夫ノ宦ト為  
シ大將軍ニ任ス範車城ヲ守護シ北方諸國ノ押ヘトナル  
義鎮カ父權冠者義行ハ往昔章宗ノ恩顧ヲ蒙リ總軍曹事  
官トナサレ北嶺ニ入シム日數ヲ不歴ノ蘓敵ヲ破リ印符  
ヲ得テ都ニ歸リ幕下ニ属ス範車城ヲ築キテ守護ス其頃  
北天竺ニ攻入龍海ヲ渡リテ一ノ島ニ至ル山河奇麗ニノ  
悉ク金玉ナリ其所ノ人ハ靈草ヲ煎ジテ飲物トシ五穀ヲハ

多ク食スルヲナシ生類ヲ殺シ食物トナストヲ甚嫌ヘリ  
故ニ人正直ニノ邪煩ナシ此島ニ伊香保ノ行辰ト云ル老  
仙人アリ本命ノ法ヲ行フ容貌常ノ人ニノ異怪アルヲナシ  
徳ハ古人ニマサレリ義行此人ニ歸依シ尊敬シテ長命ヲ  
得タリ其後唐土ニ往來シテ或ハ現レ或ハ隱レテ定メナシ  
愚按スニ鎌倉實記ノ作者右ノ金史ニ出タル義行ノ名ニ  
義經ヲ牽合センカ為ニ本文ニ秀衡ノ異見ヲ書シ義行  
ノ名ハモト義經ノ訓後京極良經ニ同キヲ以テ是ヲ諱  
テ賴朝勘氣ノ後鎌倉ニテ名付タルヲ秀衡カ名付タル  
ヤウニ云紛ラシ唐土マテモ義行ト名乗タルト云基本

ヲ決定シコレニ細註ヲ加ヘテ是ヲ潤色シ又評論ヲ書  
シテ右ノ一條ハ雜記小説ニ依テ記スル故ニ信用為シ  
難シト云リ是何ノ言ゾヤ信用為シガタキコトヲ舉テ人  
ヲ惑ハシムルト如是雜記小説ヨリト云ハ高館且勲功  
没落ノ時蛇ノ出タルト云一條也  
記ヲ評シテ勲功記ニ義經蝦夷ニ落タルト云ヨリハ事實  
鎌倉實記ノ  
事實ヲ指ス大ニ異ナリナト云ト雖モ他ヨリ見ル所ハ  
畢竟勲功記ト同日ノ談ナルヘシ金史別本ニ義行ト云  
者仙人トナリタルヤウニ書シモ好事ノ者ノ傳聞シテ  
是ヲ書ニ筆記セシモノナランカ日東ノ陸華仙ト云ルハ  
日本ノ陸奥氣仙郡ノコトヲ云ルニヤ又栗原ノ華山ヲ

云ルニヤ又陸華仙ト云ル所往昔有リケルニヤ未コレアル  
コトヲ聞ズ又義行ト云者金國へ渡リタルト云ハ虛説ニモ  
アラザランカ義行ハ義經ノコト也ト云ハ理ニ於テ當ラズ  
夫義經ハ智謀武勇他ニ耻ルコトナキ猛將ナルコトハ人徧ク  
知ル所ナリ平家追討ノ中我カ意ニ不叶コトハ多ク頼朝  
ノ下知タリト雖モ不肯之況ヤ諸士ノ異見ニ從ハンヤ  
已カ知畧ヲ專ラニメ終ニ蓋世ノ功ヲ成リ是ヲ以テ推  
ス凡ハ義經實ニ金國へ遁レタリ凡鎌倉ニ何ノ慕シキ  
コトアリテ外國ニ在テ義行ト名乗ンヤタトヒ義經ホドノ  
勇猛ノ人ニ非ス凡敵對セシ方ニテ改メ呼ル名ヲ用ヒンヤ

平家追伐中鎌倉ヨリノ下知ヲ用ヒズ諸士ノ異見ヲ聞  
サルヲ以テ人ニ不降ノ氣象ヲ見ルベシ秀衡ノ異見ニ從テ  
志ヲ改メ頼朝ノ機嫌ヲ伺フ為ニ義行ト名乗ラバ日本ニ  
任スル中コソ龍モ有ヘキニ異國ヘ涉リテ後頼朝ニ何  
ノ用カアラン是金ノ源義行ハ陸華仙ノ義行ニシテ源  
義經ニハ非サルト辨ヲ待ズシテ分明ナリ鎌倉實記ノ  
作者偶金史別本ノ事ノ似タルヲ見出シ且松前へ渡リ  
タルト云俗談モアルニ依テ如是傳會セシ成ヘシコレ  
童蒙ヲ欺クノ手段トヤ云ハン

國衡塚 柴田郡 六丁餘ヲ隔山下ノ深田ニ有

柴田郡福田村ニ國衡ノ塚アリ大高宮ノ西ノ田ノ畔ニ有  
三町餘ヲ隔ツ塚ノ上ニ杉ノ古木アリ國衡義盛カ矢ニ中  
リテ大串ニ討レシ所ナリ同郡平村ニ國衡馬ヲ深田ニ翔  
込タル所大高宮ノ北四丁餘ヲ隔山下ノ深田是ヲ馬取沼  
ト云今ニ於テ村民是ヲ耕スナシ刈田郡曲竹村ニ白丸  
頭龍ノ祠アリ國衡カ屍ヲ此祠ノ邊ニ座ミ叢祠ヲタテ、  
コレヲ祭ル

一説ニ白崩明神長野ノ邊ニ小山アリ崩テ白丸見ユル也此  
所ニ西城戸太郎國衡カ首ヲ埋メテ明神ニ祭ルト云リ

耳輪堂 柴田郡 六丁餘ヲ隔山下ノ深田ニ有

耳輪堂ハ始京都六條坊門西洞院ノ西ニアリ源賴義東征  
ノ日凶徒ノ耳ヲ悉ク殺テ都ニ携ヘ此地ニ埋メ堂ヲ其上  
ニ建テ等身ノ弥陀像ヲ安置ノコレヲ薦ス今其所不詳ト  
雍州府志ニ云リ

辨慶納大般若經 八

參河國御油ヨリ吉田ヘノ間ニ小坂井村アリ此村ニ免足八  
幡宮アリ社領九十三石毎年四月十一日此宮ニ於テ風祭有  
昔武藏坊辨慶吾孀ヘ下リケル片今橋斷絶シテ此所ニ七日  
逗留シケル内大般若經六百卷ヲ頓寫シテ此社ニ奉納シ  
ケルトテ其經今ニ相傳フ

產湯水ハ洛陽紫竹村大德寺ノ末寺大源菴方丈ノ南庭

アリ相傳フ此地義朝ノ第宅ニシテ義朝ノ愛妾常盤此所  
ニテ牛弱ヲ産ス其時此井ヲ汲テ產湯ニ用ユ土人此地ヲ  
古御所ト云ト雍州府志ニ出

光堂三代之太刀

光堂三代ノ太刀アリ清衡ノ太刀ニ尺餘金具鞘等今ニ殘  
レル處アリ切先ノ曲レルヲ其儘箱ニ入テ見セシムル故ニ  
箱ニカクレテ短ク見ユルニ基衡ノ太刀長一尺八九寸程  
柄鞘ナシ朽失タルナルヘシ秀衡打刀長一尺六寸餘幅一

寸二分樋太ク一筋細ク二筋アリ是又柄鞘ナシ以上三柄  
ノ刀何レモ錆朽テ金色見ズ元禄年中ニ棺ノ内ヨリ出セ  
リト云義經ノ短刀七寸二分是高館ニテ自殺シタル刀也ト  
云義經記ニハ自殺ノ刀ハ三條小鍛冶カ作テ鞍馬ヘ納ル  
刀ノ六寸五分アリケルヲ別當申オロシテ義經ノ守刀ニ  
ナシタル也ト云リ何レカ實説ナルヲ辨シ難シ

漆万盃 十一

朝日あさひ夕日ゆふひややホホ漆し美み盃さかづきのの億いっぴやく  
是古来俗間ニ云傳ヘル歌ナリ一説ニハ金億ヲ斥云リ郷説ニ  
漆万盃ノ内ヘ黄金億金ヲ交ヘ土中ニ埋ミ隠シ置テ末世ノ

子孫ニ遼リ傳ヘントテ詠シ歌也ト云リ其歌今何レノ地  
ナルヲ不知其朝日夕日ノ照ス樹モ今枯タルナルシ里人  
ノ説ニ金雞山ノ土中ニ在ト云此山朝旭夕陽ノ照ス所ニ  
シテ方形ノ臺ニ築キ昔黄金ヲ以テ雞ノ雌雄ヲ造ル土中  
ニ築籠タル故金雞山ト号スルト云リ此山毛越寺鬼門ニ  
當ルト云

按ルニ沾涼カ江戸砂子ニ是ニ似タル丁アリ昔武藏多  
摩郡定野ノ中正觀寺ノ薬師堂ノ棟札ニ朝日長者日連い  
カ書タルニハ漆千盃朱千盃黄金千両錢十六万貫朝日  
サスタ日カヤク藤木ノ下ニアリト云リ

常盤ノ墓

常盤カ墓近江國關ヶ原ト今洲ノ宿ノ間ニ山中ノ里アリ  
義經ノ母常盤カ墓道ノ北森アル所ト云リ又蟠龍子カ  
俗説辨ニハ此墓常盤カ墓ニアラサルトヲ辨セ

金色堂三代棺

聞老志曰後水尾朝寛永中黄門政宗君治世修補金色堂次  
令吏發而點檢焉清衡棺長六尺廣二尺裹之以白綾漆其體  
納雄劍一口並鎮守府將軍印璽基衡裹之以白絹朱其體襯  
白衣表錦袍秀衡同之藏和泉三郎忠衡首函高二尺方一尺  
五寸黑漆秀衡擊刀長一尺六寸廣一寸二分用太刀是乃衛府太刀

也俗子以聲音之  
同誤傳其文字

長一尺六寸出秀衡棺中

光堂物語

友直嘗得此一冊於俗間而後問虛實於關山僧某某曰此  
說當有取捨思有西京雜記酉陽雜俎輟耕錄等類之事則  
奇怪亦不忍捨之故今載而以助同志之談柄矣

淡真の園藝并於中寺村天宗關心中寺光堂ハ東鑑ハ金色  
堂といふ内ハ金箔と押して其光甚くたつた光堂といふ  
内ハ清衡基衡秀衡三代の死骸棺に納りて佛壇の下に板を以  
て蓋し置りて其石は早霜に歴る事久く板を朽損して仙臺  
其趣を述べて元禄十二年己卯の暮仙臺より破換修葺あり此後奉納ハ

遠藤曰吾等のるるを以て後人として別は僧屋と建て佛像并に棺は  
よりしむるに將た死と潜し拜見しし者三人の中は寺看主浄心  
院是僧名ニシテ  
寺院ノ号ニハ非ス隣村の小幡村天宗満福寺住持は寺中寺衆徒の中  
にトキ此人の物語は記しむ事尤のごとし

一 清衡の棺中檀の下より長六尺幅三尺黒漆棺の上は徳金之御死骸  
常の人のより長八並入るる太き色白くえゆる紫木は白波の小袖共  
色紫木は錦の直垂なり一方は太刀一腰鼻冑袋一ツは肉より色々の書物  
あり鎮守府將軍の綸旨あり

一 基衡の棺東北隅乃佛檀の下より棺は長幅清衡の棺と同し骸  
骨も同じ棺は朱漆なり一方は太刀小道具色あり

一 秀衡の棺西北隅乃佛檀の下より黒漆長幅前より一方は  
太刀小道具色あり

一 秀衡の棺の側より首桶あり高三尺四方を尺五寸黒漆より白布忠衡  
の首より一説は泰衡の首といふ書付ははめて分るるは  
右三代の棺首桶とも布漆かけ懸地はぬるなり三汗はとも白紫木  
錦の車置袴へ下は三汗各ふくる袴はとも常の人の異るは小鼻  
むしげりと似ても長並入るる太きありしとも結跏趺座へ清衡  
御死骸基衡御死骸秀衡御死骸と唐中うに棺は書付ありは  
も虚言ありす事能へり

元禄十二年八月日



右の人々様中坊の聖年此と浄心院の三年まで此の快多の早條兼之  
中聖年より程乱はたり小島村とせしより方城知は足より先  
天正年中の事とら也衆徒の僧教人彼死骸と云よりよ其人或  
短命かハ盲目とあり一を徳なき事也と云傳はるる事  
夫を物語終

愚按元二清衡ハ大治元年丙午七月十七日ニ卒ス元禄  
十二年迄五百七十四年基衡ハ保元二年丁丑三月十九日  
ニ卒ス元禄十二年迄五百四十三年秀衡ハ文治三年丁未  
十月廿九日卒ス元禄十二年迄五百十四年ナリ

又 十五

可成談よ云荒木十左衛門といふ人御使よ奥州よ下アツ  
其少前小光堂の佛に目よ入れざる金と人の盗う事あり  
僉議よとて秀衡が棺をゆきたり棺五重をより外の棺ハ  
塗より内の棺一重ハ桐に白木より秀衡が死骸生るがより歳の  
程五十より長ハ中人かハ低ハ髪ハ三寸ばかり生より禪殼ハ  
やうなる物よと棺と詰たると五百年をよりなるハ形の損せし  
此者の徳よや側よ泉三郎が棺是ハ志よりたる晒頭壹有  
ハともて秀衡が棺の内より枕一ツ太刀一振出置て國王の者  
どもが十左衛門よ見せしと十九衛門ハ馬と能く乗るれば  
夫と習ふとて若藤本五左衛門といふ人奥州まで暮しと行て見

つらとて茂卿が幼れ時語アキ枕ハ常の繰枕ハ房まで深紅  
なるが手にて障れば蝶のごとく手は附くとらん太刀ハ二尺ばかり  
鍔もわたりたるに三枚鍔ハ柄ハ深紅の糸に巻く中びり  
より鮫の錦と着せり柄頭ハ引通とありと云錯付てぬけ  
びと語アキ奇怪の物語なり

愚按スニ荒木氏ハ公儀御目附後ナリ龜千代君綱村公  
御幼名

御幼名ニ付寛文元年五月下旬御同役桑山伊兵衛殿御

命兩人仙臺へ下着同年十一月下旬江戸へ御登ナサレ候

其可成談ニ云ルハ此人ハナナルニヤ

百済始又ニ荒木氏ハ御門ニ入ル外ニ與テ下サレ

一 元文三年戊午ノ秋光堂ノ丁江戸表ヨリ御尋ニ因テ仙

臺ヨリ御書上人寫左ニ載ス

或傳書有之候奥州光堂ノ事ハ秀衡が死後又泉ニ所據

奉委洵多ク其法書海ノ執取知ハ光堂仙臺領内成實所

品ノ法書海向ハ左ノ通ナリ

一 光堂奥州領磐井郡平泉と申所ハ秀衡舊蹟ニ由ル依清衡

基衡ニ許シ死後ハ棺納堂ニ建替金箔ニ濃ニ依住古より

光堂ニ申來依右堂ノ内棺納堂ニ依奉キハ阿弥陀其ハ依佛友

十體ノ内ハ古ノ彌陀一躰百餘葉ニ盜元由出度ハ依佛本眼

にて目入ノ金と盜ハハ依不依佛法ハ依其所寺号ハ申所寺

中山山光寺と一山名に光堂と別當金色院と申候

一 秀衡の棺と云ふ事 死後一説に平元年一汗に死後一山と老僧の角

見中山山光寺に由り傳へ元禄年中光堂修造節之文に棺は

移置中山山光寺に金色院一説は秀衡の棺汁朽腐りて

故に開き板厚一寸程を内外に澁を塗り上り金色院に

皮肉の骨(乾)の色落し髪は白く一寸程の髪見えず長中人程

も見えず中山山光寺に清衡基衡の棺を破りて中故棺中

見ず中山山光寺に棺を本地に合流る濃中山山光寺に

一 泉三郎の棺と云ふ事 秀衡の棺 泉三郎首捕頭一説は是巻

包置の左晒頭と云ふ事 包置の左晒頭と云ふ事 包置の左晒頭と云ふ事

一 右三郎の棺と云ふ事 太平記に由り三振光堂納室中山山光寺に枕有之候と云ふ

傳由り山光寺に黄金の棺と云ふ事 太平記に由り山光寺に黄金の棺と云ふ事

右之通住僧古人名 源氏自國元為中登申候と云ふ事 源氏自國元為中登申候と云ふ事

松平隆興守内 遠藤文七郎

元文三年八月日 遠藤文七郎

三條吉次 古

金商人三條吉次名諸書不同義經記に信高と云 熊坂人

謡毛又同之太平記劔卷に五條吉次季春と云 義經勲功記

同之鎌倉實記に末春と云 平家物語に奥州人金商人吉次

ト云者京上リノ次ニハ必鞍馬へ参レリ堀彌太郎ト云シハ  
此金商人ノ子ナリト云リ  
又鎌倉實記ニハ三條吉次後ニ堀彌太郎景光ト改名スルト  
云ハ甚誤ナリト云リ  
吉次屋敷址膽澤郡衣川村ニアリ居館門ナドノ舊礎今ニ  
残レリ又山目南磐井川近所ニモ吉次屋敷址ト云ルアリ  
奥州白川ト白坂驛トノ間ニ葦菴原ト云ル所アリ海道ノ  
傍ニ小社アリ昔三條吉次同吉内同吉六ト云ル兄弟ノ者  
毎每年都ヨリ黄金商ノ為ニ平泉ニ下リケルガ或時此所ニテ  
盜賊ニ害セラレ此小社ハ其墓ニ祠ヲ立シ也ト云葛菴

捨置タル地故ニ名付ルトゾ又分散橋ト云小橋アリ盜賊  
金ヲ分散セシ所也ト云

炭燒藤太石碑並引十八  
郷人傳説近衛院御宇奥州栗原郡三迫間有藤太者賦性  
朴直賣炭爲業一日有異女来宿藤太家強約爲婦問之自謂  
京洛之人也其女知此郷山内産黄金教太掘之日多得金太  
有三子曰橘次橘内橘六不幾大富起家到今其郷號曰金生  
其郷内山上有三子舊館地曰南館東館西館其右有金山澤  
蓋藤太掘金地左有雞坂太積富時作金雞安山頂有時鳴云  
山南有藤太古墳存五輪雙石塔舊跡今屬郡長佐々木左内

田莊内佐氏天性好善施仁感其誠致富請余往看之星霜已  
經五百餘年塔石傾倒文字消磨余乃述偈記焉佐氏恐其舊  
跡倍滅絕今特建石刊余偈引貽之後世云  
奇哉藤太至誠深德化女感來富金功  
功勳只餘雙石塔遺方千古令人欽  
臨濟正宗三十五世前任大年河北開創鳳山瑞老人書  
義經古館

源義經ノ宅洛陽楊梅通ノ北油小路西ニ六條堀河御所址アリ  
土佐房討手ニ上シ時堀河夜討ト云此所今竹藪茂リ云  
跡ノ殘レリ又大宮四條ノ南ニ義經ノ宅ト云ル上庭  
上游覽ノ時刀ヲ掛タル松ヲ刀掛松ト云然ルニ此地ハ細  
川頼有戰死人場ニメ後ハ松ヲ植テ徵トス者ニメ義經  
ノ宅地ニハ非スト云リ此事雍州府志ニ載タリ  
下粟田ニアリ義經關原與市カ耳鼻ヲ殺キ並ニ從者十人  
ヲ斬ル舊跡ナリ血洗池義經與市カ從者等ヲ斬ル血刀  
ヲ洗シ舊跡ナリ是又雍州府志ニ出  
奥州江刺郡伊手村ニ源休館ト云アリ郷説ニ義經ノ居城ト

云杉ノ古木アリ此事イブカシ

力士之塚

佐藤忠信ガ愛妻カシカ塚京三條白川橋西南ノ人家ノ後園ニアリ一説ニ須藤刑部俊道ノ塔之下ト云ト雍州府志ニ出

常陸房海尊

俗説辨云俗説ニ常陸房海尊ハ園城寺ノ者也後ニ義経ニ仕テ高館ノ合戦ノ前山中ニ逃入テ仙人トナリ今ニ至テ富士浅間湯殿山ナトニ時々出現スト云今按テ五雜俎ニ明ノ金陵ノ唐詩ト云者仙術ヲタシム或人家ヲ出テ山ニ入ラントテス、ム唐カ云家ニ老母アリ出ルテアタハス

世間不孝ノ神仙ナシト答ト記ス依之云ハ、海尊カ如キハ君ヲ捨テ生テ貪ル不忠ノ神仙ナランカ假令仙家ニ彼ヲ宥ス凡議スルニ倫理ヲ以テセハ其罪既ニ五刑ニ當レリ又海尊今ニ存命居テ所々ニ出現スルヲ大ニ非也ニ程全書ニ仙術ノ下ヲ論セル如ク彼海尊モ常人ヨリハ長命ト云ハ、龍モアルヘシ今ニ存命居テ所々ニ現セリト傳フルハイト拙ナシ常陸房海尊カ、第一卷ニ既ニ舉之又享保年中常陸國阿波大杉大明神海尊ヲ祭レルガ靈驗ノヲ有ト云テ彼所ニ飛玉ヲ此處へ飛玉フト云テ遠近ノ人信仰ヲ為シ其神輿ヲ近國へ擔ヒ江戸ノ方迄擔ヒテ老若是ヲ尊崇

セシコ夥シ遂ニ公ヨリ是ヲ制セラハル是海尊が靈驗ニ  
ハ非ズノ畢竟妖僧奸巫等ガ偽爲ス丁ニノ愚昧者ノ惑  
ヲ取ル所ナリ是ヲ禁メズンバ有ベカラズ

家老館

磐井郡東山長坂村ニ家老が館ト云アリ里俗ノ曰是館昔  
秀衡ノ家老ノ居城也ト云傳フ四方離レタル山ノ頂ニノ  
甚高シ上平ニシテ廣シ池アリテ水ヲ貯フト云今ハ島ト  
為ス其人ノ名ヲ傳ヘ大石碑アリ近世里人ノヲ立シト云  
花楯城刈田郡圓田村ニ在リ佐藤庄司カ叔父河邊太郎高綱

カ城也又同村ニ築館城アリ里人ノ説ニ佐藤太郎カ城ト  
云是又高綱カ城ナルヘシト名迹志ニ云リ

按ルニ東鑑卷九ニ佐藤庄司カ叔父河邊太郎高綱ト云リ  
高綱トハ俗傳ノ謬ナルニヤ又別人ナルニヤ

神樂岡

遠田郡篁嶽觀音堂北一町餘ニ願念嶺ト云所アリ是田村ノ  
夷賊高丸ヲ殺セシ神樂岡也ト云按ルニ此外ニモ奥州ノ  
中ニ神樂岡ト云ル地所々ニ在リ

羽黒山大堂

出羽國羽黒権現ノ堂ヲ大堂ト云秀衡ノ建立也其素朴成

丁古代ノ製ト云ツヘシ三山雅集ニ云一記曰鎮守府將軍  
兼陸奥守藤原朝臣秀衡大堂建立云云於今秀衡ノ妹德尼  
子ノ木像在本社中又曰藤原秀衡羽黒山登山

愚按スニ三山雅集二卷羽黒山東水著ス其書ニ德尼子  
ノ像ハ坐像ニテ一尺五六寸余モ有ヘシ毎年襟卷ヲ製  
服セシムルト云リ又按スニ鎌倉實記ニ德尼子ノ丁アリ  
曰奥州岩城判官代府主兼帶海道小太郎成衡之後室德  
尼ト申ハ源頼義ノ姫ニテ母ハ多氣權守宗基カ女ナリ  
後三年ノ時義家養女トメ且理權守清衡ニ預ケテ常陸  
大椽清行嫡子小太郎成衡ニ嫁ス基衡カ媒ナリト云ク

○以上ノ兩説不同疑ラクハ同人ニメ異説ナルベシ系  
圖ヲ考ルニ秀衡ニ妹ナシ識者ニ問テ之ヲ決スベシ

長命山城 共

長命山宮城郡上谷刈村ニアリ山嶺他ノ木アルナク青  
樅方本枝ヲ交テ直立セリ郷人長命山ト云東鑑ニ泰衡カ  
軍兵コモリタル國府中山物見岡ト云ルハ此所ノ館北ヲ  
伊谷澤原ト云頼朝ノ陣所ナリト云傳ヘリ  
東鑑ヲ考ルニ頼朝ハ此所ニ陣セズ小山下河邊等ヲ荒  
東向ラレ其身ハ玉造郡ニ赴キ玉ト有後世誤傳ヘタルニヤ  
北條九代記頼朝奥入 七七



北條九代記ノ中頼朝奥入ノ一全ク東鑑ヲ以書タリト雖モ  
東鑑ニ異ナルト多シ是世人ニ售シテヲ求ルカ為ニ造言  
ヲ以テ原文ヲ偽リ飾レリ又原文ニ傳寫ノ誤アルヲ考ヘ  
ズメ其說ニ從テ之ヲ改メザルモ亦多シ讀之者本書ヲ參  
看シテ謬誤ヲ正スヘシ助公法師カ歌モ本書ニ異ナリ別  
ニ考ル所有テ然ルカ余畜書ヲ不廣シテ多ノ事ヲ漏シタル  
遺憾ナキト能ハズ

田村將軍建立堂社 一

或時友人ト夜話ノ次テ仙臺領内ノ田村建立ノ堂社ノ一  
ニ及フ其需ニ應ジテ弟子ヲノ是ヲ封内各迹志ニ考ヘシメ

- 一 間コレニ增添シテコニ載ス此外ニモ又多シト雖モ悉ク尋  
求ルニ便ナシ餘ハ他日ノ考ヲ俟ト云
- 一 鎮守府八幡宮 膽澤郡八幡村ニアリ東鑑ニ詳ナリ
- 一 達谷窟毘沙門堂 磐井郡達谷村ニアリ東鑑ニ詳ナリ
- 一 斗藏觀音 富山六町ニアリ大同年中建立
- 一 白山社 江刺郡角掛村ニアリ田村東征時所祈也
- 一 聖玉觀音 仙臺城東石那坂ニアリ田村東征間ニ  
林觀宮城ノ産ナル聖玉子ト云ル側室アリ其人護持ノ觀音ナリ  
寺アリ満金山圓福寺ト号ス寺ニ池アリ此池中ニ鹽釜社  
ノ七ツノ釜ノ内一ツ有ト云ニ三十年前池中ヨリ其釜ヲ

取上シニ俄ニ大雨降テ池へ流レ入タリト云今池邊ニ注連  
ハハ置リ釜ノ形今鹽釜ニアル釜ニ同ジト云リ

一 松嶋五大堂 松嶋ノ島上ニアリ大同二年田村創

一 立五大尊ヲ安置ス又一説慈覺ノ建立ト云

一 富山觀音 宮城郡手樽村ニアリ大同年中建立

一 別當富山大仰寺此山ヨリ松島ヲ眺望スル絶景筆舌ノ

及フ所ニアラズ

一 鹽竈社 加美郡四竈村ニアリ田村勸請ト云

一 笥嶽觀音 遠田郡無夷山笥峯寺ト号ス此山田村

ノ舊跡多シ

一 和淵神社 同郡和淵村ニアリ貴船明神

一 牧山觀音 牡鹿郡湊村鷲峯山長禪寺ト号ス本尊

秘佛海底ヨリ網ニ入テ得タリ田村造立又慈鎮ノ関基ト

モイフ

一 大武觀音 栗原郡佐沼庄南方村夷賊大武丸カ

首ヲ座ミテ大同年中田村建立ス又大嶽觀音ト云

一 八幡宮 栗原郡二迫庄八幡村ニアリ延暦年中

建立昔寺アリ小治山源東寺ト号ス義家奉納ノ劔甲冑鎧

矢等アリ

一 清水觀音 同郡三迫庄岩ヶ崎村音羽山清水寺

一 谷寺ト号ス

一 小迫観音 同郡小迫村寺アリ昔ハ小迫山正<sup>天</sup>大寺

一 按スルニ坂上田村丸ト藤原利仁トヲ俗誤テ一人ト為シテ田

一 村將軍利仁ナト、云故ニ田村ノ子ニ利宗ト云者アリト

一 大和野云説アリテ筆ヲ操リテ事ヲ記スル者モ間コレヲ誤

一 レリ爰ニ坂上將軍俊宗ト云ルモ後世縁起ヲ作レル者

一 ノ妄説ナリ 俗説辨云田村丸ノ子ニ伊奈瀬利宗

一 ト云者アリト據ナシ日本後紀續日本紀大系圖ヲ

一 考ルニ田村ノ子ヲ廣野麻呂ト云伊奈瀬五郎ト云

一 者ナシ

一 長谷観音

一 登米郡水越村ニアリ寺ヲ遮那山長

一 谷寺ト号ス

一 鱒淵観音 同郡鱒淵村寺ヲ竹峰山華足寺ト云

一 大同年間田村ノ乗馬此所ニテ灰シタルヲ埋テ観音

一 ヲ建タリト云

一 矢作観音 氣仙郡矢作村長谷山観音寺ト号ス

一 小友観音 同郡小友村溪頭山常膳寺ト号ス

一 猪川観音 同郡猪川村龍福山長谷寺寶永年中

一 堂下ヨリ掘出セシ鬼ノ齒ト小刀トアリ

右三ヶ所何レモ一丈ニ近キ大佛ナリ

一五葉山神社

同郡上有住村ニアリ

以上二十一ヶ所ノ堂社各縁起アリ今略之是仙臺領内而已ニシテ不汝他領矣田村之所創立觀音多謂長谷謂大同謂飛驒内匝一夜造立三所之堂ノ類悉信スルニ不足○名迹志云田村之於觀音到處必立焉號之多以長谷焉田村所信者蓋雍州清水寺之佛也胡爲然皆是後人擬田村且不辨所信之事實妄呼之者亦可疑

大將軍

先

コレヨリ以下大槻本ナリ芸叢本ニナシ

北土川ノ東長部村ニ大將軍

里俗ニ此神ヲ大上宮ト云者アリ誤成ヘシト云神有

山中也是何神タルヲ知レル者ナシ昔八里人祭日ニ齋シテ參詣セシト云リ

愚按スルニ京東山ニ將軍塚アリ桓武帝平安城ヲ築等ニ見タリ清衡平泉ヲ築ケル時平安城ノ將軍塚ヲ移シ勸請シケルナルベシ

辨慶石

卅

後花園院享徳三年奥州ヨリ辨慶石入洛スト和漢年表録ニ出タリ

基衡之室

卅一

東鑑ニ平泉毛越寺大阿彌陀堂并小阿彌陀堂ハ基衡ノ室

宗任カ女子ノ建立スル處ナリト云リ按スルニ鳥海三郎宗  
 任ハ厨川次郎貞任カ弟ナリ康平五年將軍賴義公ト戦テ  
 貞任ハ誅戮セラレ宗任ハ囚ト成テ都ニ登セラルコノ時  
 清衡ハ僅ニ二歳ニシテ母ノ懷中ニ有リ母ト云ハ即貞任  
 カ妹ニメ宗任トハ兄弟姉妹ノ九族ノ中ナリ然者宗任カ  
 女子基衡ノ室トナル丁ヲ得ベカラズ如何トナラハ基衡  
 ノ父清衡二歳ノ時囚トナレル宗任カ女子ナラハ老婦士  
 夫亦可醜也ト云リ今基衡ト宗任カ女子トハ老婦士夫ト  
 タモ云丁ヲ得ス况ヤ其正ヲヤ是必別人ヲ誤レル者ナル  
 ヘシ

平泉雜記卷之四

目錄

藤原清衡生卒考	一	基衡卒去	二
秀衡卒去	三	賴朝卿御下文	四
清衡經藏寄文	五	賴朝卿送秀衡入道書	六
北條貞時同宣時文書	七	學頭職補任狀	八
從本寺之下知狀	九	北畠顯家郷國宣	十
若狭守行重文書	十一	平泰忠文書	十一
仁木義長文書	十二	越前守親重文書	十二
古文書	十三	關白秀次公御朱印	十三

秀次公御定書 十七 淺野長政文書

朝鮮陣御掟 十九 中尊寺神事制札

御墨印寫 廿一 從東叡山之文書

從東叡山法度條々 廿三 同書狀

毛越寺寺領之事 廿五 中尊寺寺院

毛越寺寺院 廿七 秀衡古城

泰衡城址 廿九 黑岩口

一野 卅一 津久毛橋

秀衡矢立杉 卅三 千塚

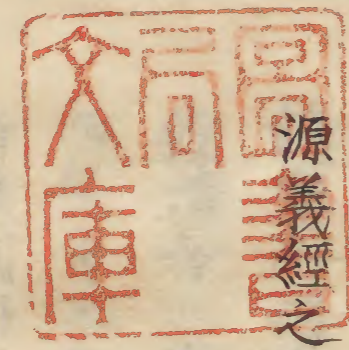
鬼切部 卅五 佐藤忠信之鎧

義經首 卅七 南部戸頭武國 卅八

永福寺 卅九 平泉圖 四十

義經辨慶等之笈 卅一 牛若殪長範 卅二

源義經之容貌 卅三 源賴朝之容貌 卅四



平泉雜記卷之四

相原友直著

藤原清衡生卒考

鎮守府將軍陸奥出羽押領使藤原清衡ハ父ハ且理權太夫  
 經清母ハ安倍賴時カ女ナリ七十代ノ帝後冷泉院ノ康平  
 四年辛丑歳ニ生ル同五年壬寅九月父經清ニオクレテ後  
 清原武則ニ養育セラレテ子トナル又一説ニ武則カ嫡子  
 荒川太郎武貞カ子トナルト云リ七十三代堀河院寛治三年  
 己巳二十九歳ノ時源義家朝臣ニ加勢シテ武衡家衡ヲ征  
 ス奥州平均ノ後同六年壬寅三十二歳ノ時陸奥出羽ノ目



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '平泉', '藤原', and '清衡']*

代ト爲リ其後奥六郡ヲ領シ陸奥出羽押領使トシテ鎮守  
府將軍ヲ兼又同御宇嘉保元年甲戌三十四歳ノ頃江刺郡豊  
田館ヨリ磐井郡平泉ニ移シテ居館ヲ構ヘ平泉館ト号シ奥  
御館ト稱ス同御宇長治二年乙酉四十五歳ノ時中尊寺ヲ  
建立ス七十四代鳥羽院天仁元年戊子四十八歳ノ時紺紙  
金銀泥行交一切經ヲ書寫セシメ經堂ヲ建立ス鳥羽院ノ  
勅願ナリ即今ニ相傳ル所ノ經並堂是也同二年己丑金色  
堂ヲ造立ス是又今アル所ノ堂佛像即是ナリ七十五代  
崇徳院天治三年丙午三月廿五日經堂ニ所領骨寺ヲ寄附  
ス此年故元アリテ大治元年也此歳七月十七日行年六十

六歳ニノ卒ス即厥ヲ金色堂中央ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍  
今ニ在リ

基衡卒去 二

鎮守府將軍陸奥出羽押領使藤原基衡ハ七十代帝後白  
河院ノ保元二年丁丑三月十九日ニ卒ス厥ヲ金色堂東北  
ノ隅ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍今ニ在リト云

秀衡卒去 三

鎮守府將軍陸奥守從五位上藤原秀衡ハ八十二代 後鳥羽  
院文治三年丁未十月廿九日卒スルト東鑑卷七ニ出タリ  
義經記ニ文治四年十一月廿一日ニ卒スルト云ハ誤リナル



ヘシ大系圖ニ歿スル歳九十二ト云リ依之考レハ七十三代  
堀河院ノ永長元年丙子ノ歳ニ生レタルニヤ文治三年マテ  
九十二年ナレハ也是又歿ヲ金色堂西北ノ隅佛壇ノ内ニ納  
テ今ニ在リト云リ

賴朝卿送秀衡入道書 四

東鑑云文治二年四月廿四日陸奥守秀衡入道請文參着貢  
馬貢金等先可沙汰進鎌倉可令傳進京都由載之云云是去頃  
被下御書

御館者與六郡主予者東海道總官也尤可成魚水思也但隔  
行程無所干欲通信又如貢金者為國土貢印爭不管領哉自

當年早予可傳進且所守勅定之趣也者上所與御館ト云

清衡經藏寄文 五

以下ノ文書古來中尊寺ニ相傳ル處也今傳寫ノ本ヲ以テ  
寫スカ故ニ亥豕ノ誤アルト是ヲ計リ難シ

鳥羽院御願

關山中尊寺金銀泥行文一切經藏別當職事

僧蓮光所

所領骨寺磐井郡有之御堂出入料田淡田畎屋敷壹所瀬原

有之

燈明料屋鋪肆所内北谷赤岩両所兼有之瀬原村有之

每日御佛供料白米二斗可入銅鉢貳之自高御倉可被取請之  
每月箱拭料上品絹壹疋白布壹疋自御改所可被取請之  
每日每御佛事請僧壹口可被請定  
每年正月修正二季彼岸懺法每月文殊講彼以骨寺田畑一向  
可募之故也

是偏聖朝安穩御祈禱無懈怠可令勤仕右件於自在房蓮光  
者為金銀泥行交一切經奉行自八箇年内書寫畢依之且為  
奉公且為器量故御經藏別當職所定也院中令寄進蓮光往  
古私領骨寺然間限永代住蓮光相傳致御經藏別當並骨寺  
者不可在他人妨仍可令寺家宜承知之狀如件

天治三年丙午三月廿五日

俊慶判

金清兼判

坂上季隆判

藤原清衡朝臣判

愚按云二天治八七五代ノ帝崇徳院ノ年號三年ハ大  
治ト改元ス平泉古来ノ説ニ天治三年七月十七日ニ清  
衡卒スト前太平記ニ且理經清ハ康平五年ニ誅セラル  
此時清衡ニ歳ト云リ然レハ康平四年ニ生ル此歳ヨリ  
大治元年マテ六十六年ナリ

賴朝卿御下文 六

鳥羽院御願

關山中尊寺御經藏所領骨寺内籠居人等事

早於彼雜人等者還本任所可成安堵思也但限骨寺内境東者鎰掛南者磐井川西者山王岩屋北者峯山堂之末限馬坂惣於境者可限水境也仍所被仰下執達如件

愚按云東鑑ニ被下御奉免狀ト云ハ即此書也親義ハ

齋院次官親能ナルヘシ

原書ニ云ハニ親義ト云者ナシ

北條相摸守貞時同陸奥守宣時文書 七

陸奥國平泉中尊寺衆徒中寺領山野事重訴狀遣之背下知狀致違乱候間差遣使者之處代官明資尚以不承引云招其

答款早任先下知可令停止濫妨也者依仰執達如件

永仁二年十二月廿五日

陸奥守 判

相摸守 判

壹岐守殿

愚按云永仁八九十一代伏見院ノ年号二年ハ甲午ノ歲ナリ鎌倉將軍第八久明親王ノ時ニノ北條ハ七代目也壹岐守ハ葛西家ナルヘシ

學頭職補任狀 八

補任

中尊寺學頭職 同免田壹町

屋鋪壹所

宇津木根村在之

並佛性院

同小坊地壹所事

權律師公圓

右職任行盛律師今月五日返狀可令領掌之次坊地之事任

賴順應長元年十月廿四日讓狀不可相違仍補任如件

正和二年三月七日

別當法印權大僧都 判

愚按元二應長八九十四代花園院元年号元年辛亥ナリ

正和七同御宇二年八癸丑之應長元年ヨリ三年後也

從本寺之下知狀

九

可被尋註進條々

一 金色堂密供僧同經衆等長日供養法御讀經等退轉之由有

其聞早々所職相傳次第云器量勘否可被註進之矣

一 同堂經由二口所持之族在之云々所詮有二口相傳所持法否

可尋註進之焉

一 白山宮長日大般若並講讀等再以退轉云々守舊規可令勤行

之旨相觸之不叙用 被註進之矣

一 引募免田之族令懈怠寺役送年序云々可被註申名字之子

細同前焉

一 依怙衆徒等輩寺中制法雜居里中御祈禱以下寺役等一向

- 一 不法云々不偏一人註進同前矣
- 一 閣往古塲敷令居住里中或輩衆徒一同帳友以坊諸並諸堂古跡致種々耕作之由有其聞委細可註申也矣
- 一 稱自分以寺內用水等任我意伐取云々於向後者固可令停止之若有不拘制法輩者可被註進交名也
- 一 二十箇以前上落滌事聊有其聞欵可被註進名字焉
- 一 於寺中放飼牛馬之間併堂社損亡云々至自今以後者不可有此儀若令違犯者不謂親踈捕牛馬可被註申由且可被寄寺社修理欵宜隨註進左右也矣
- 一 背先規令狹少寺中小路云々早糺舊跡引繩可被廣之於及

異儀輩者可被註申交名焉

- 一 未安堵輩有之云々不殘一人可被尋註進也
- 右條々為御代官而乍令在國不加催促不及註進共以無沙汰之條併當寺荒廢之基歟所註且究淵底且存知之分無偏頗矯飾之旨載起請之詞急速可被註進之狀如件

正慶元年十月三日

沙彌判

權少僧都判

中尊寺權別當御坊

愚按元二正慶八九十六代光嚴院ノ曆号元年八壬申之

北畠中納言顯家卿國宣 十

平泉中尊寺者陸奥出羽兩國之甲區堀河鳥羽二代之勅願也  
也因茲數代之宰吏歸依年久諸方道俗渴仰日新爰頃年武  
士及甲乙人等寄緯於蝦夷集賊追伐或闖入墪門致狼藉或  
押妨寺領及駈使云云太以濫吹也慥可徒停止若<sup>一</sup>有違犯之  
輩者就註進交名可被決嚴科之由國宣所候也執達如件  
建武元年九月六日 大藏權少輔清高奉

衆徒等中

愚按元二建武八光嚴院ノ年号ニ後醍醐帝此年重祚シ  
玉フト雖モ不及其禮元年八甲戌ノ歲ニ清高ハ結城上  
野入道道忠カ子息ナルヘシ太平記ニ道忠カ子大藏少

輔カ丁アリ又伊達ノ靈山館ハ顯家卿ノ居城ナル丁ヲ  
載ス里人今ニ於テ國司館ト云今清高カ此文ヲ讀テ顯  
家ノ學ヲ紹キ其餘風ノ家臣ニ及フ丁ヲ知ル月郷ノ家  
ニ生ルト雖モ其武勇モ又國司ノ任ニ耻ル丁ナシ  
若狹守行重文書 上

平泉中尊寺一切經藏領骨寺村之事

右之所者依近年動亂雖令知行世々爲無異之間別當遠郷  
律師行榮方彼所者如元相渡申候也仍如件

延元三年二月廿八日

若狹守行重判

愚按元二延元八前ニ同ク光嚴院ノ年号三年八戊寅

ナリ此年曆應ト故元ナリ  
平泰忠文書 十二

平泉中尊寺別當領事

任被仰下之旨伊澤郡之内黒澤村同郡宇津木禰村同郡北  
保村江刺郡之内辻脇村同郡倉澤村斯波郡乙部村於彼所  
所相渡別當代頼禪所仍渡状如件

康永三年六月五日 平泰忠判

愚按元二康永八九十七代光明院年号三年八甲申也

仁木義長文書 十三

仁木左京大夫義長 書判

禁制

陸奥國平泉中尊寺領同國磐井郡骨寺事  
右於當所軍勢並甲乙人等不可致乱入狼藉若有違亂之族  
者可處重科之状如件

觀應二年正月廿八日

愚按元二觀應八九十八代崇光院ノ年号二年八辛卯ナリ

足利尊氏ノ時ナリ

越前守親重文書 十四

平泉中尊寺所領骨寺之事

右件於所領者且大伽藍御事ト申次ニ身ノ為祈禱申如元

相渡申候状如件

至徳二年八月八日

前越前守親重判

經藏別當

愚按スルニ至徳八百一代後小松院ノ年号ニ之字於字書

未考得之康熙字典云三說文籀文ノ四ノ字集韻關東

野謂四數為三ト是ヲ以テ見ル片ハニモ又四字ナルヘシ亦

昔<sup>オレ</sup>牡鹿郡湊東南ニ日輪山多福院アリ古石墳アリ其石

面ニ奉<sup>オレ</sup>為吉野先帝御菩提也延元二年霜月二十日敬白

新ト勒セリ名迹志ニ載之註云ニ字恐分畫四字ナリト

後醍醐帝崩御諸説アリト雖モ延元四年北朝曆八月

十六日ヲ以テ正トス然レハ四ノ字ナルト無疑霜月

廿四日ト勒セシハ崩御ノ日ヨリ至此日九十九日也

是百箇日ノ御追福ノ為ニ其臣タル者碑ヲ立タルナル

ヘシ又中古ニノ字ヲ用ヒタルモノ間アリ我郷ニ鼓ノ許

可ノ卷ヲ持傳ヘタル者アリ看之ニ永祿二年正月吉日

ト記セリ本邦古來文字ノ音訓ニ忌諱多シ疑ラクハ四

ノ音死ノ音ニ通スルヲ忌テ斯ク書ルニヤ又古境部

連石積新字ヲ造リシト云ルトアレハ其字ノ殘レルニヤ

又易ノ卦爻ニ働テ造レルニヤ又釋氏以ノ字ヲ以ト

書テ佛經ノ外題ニ蒙ラシムルトト祖庭事苑ニ見ル



又本邦ニテ符呪ノ首ヲ覆フニ以テ用ル<sub>ル</sub>アリ書ノ  
相似タルカ故ニニテ以テ四ニ換タルモ計<sub>ハ</sub>難シ暫ク書  
之以待識者耳

古文書ニ通<sub>ル</sub>五

可被停止別當任符事

右訴陳之趣子細雖多所詮衆徒一兩輩帶文治建久下知狀  
寺僧者行領者數代之間不取別當任符之由衆徒雖申之如  
文永元年下知狀者寺僧相傳師跡之時為寺勢之仁爭不成  
任符哉然則寺僧則可相從別當成敗別當又守先例不可致  
新義之沙汰云云者不及異儀焉

愚按云文治建久共ニ八十二代後鳥羽院ノ年号文永八

八十九代龜山院ノ年号

院主職事

右如文永元年下知者任先例寺僧之中撰器量之仁可補之  
云々而補監僧公禪之由衆徒令申之處公禪為淨行器量之  
仁雜掌申之者公禪為監僧否尋究之後可有左右次同院主  
領分瀬原村河原宿事為胸臆論之間為院主分否同尋究可  
有左右次別當割取同院主分田畠之由衆徒令申之間於行  
付之坐尋問之處雜掌不論申歟然者如元可返付于院主焉

關白秀次公御朱印

共

札朱印

一此所土民百姓等如前可有付以九年貢諸役如年来可相  
働以如何機遣仕間敷候但亂後之年来年貢ヨリ可免  
許事

一百姓横合非分之儀何方ヨリ茂中掛以者則ゆやすむ可申上以  
速可相澄事

一百姓作子當作毛付次第定置以若百姓逃失以之何者言  
百姓可有付事依所定如件

天正十九年七月五日

秀次公御定書 七

定

一軍勢於味方地乱妨豫籍之輩可為誅伐事

一對地下人百姓非分之儀不可申懸度

一於陣前火出以屋々之者と搦捕可申之自然於逐電之其

人出幸たる事

一新ぬらわし<sup>イニサウシ</sup>以下之相理一取事

一諸次第<sup>イ祀</sup>において為下侍馬人足等中掛<sup>イカラス</sup>屋々<sup>イカラス</sup>由事

右修之於違乱之輩者忽可處嚴科者也

天正十九年七月七日

秀次 書判

愚按スルニ奥州九戸左近將監政實ト云者逆意ニ依テ

天正十九年六月秀吉公ノ下知トシテ九月征伐大將  
蒲生氏郷總大將三好中納言秀次公其外諸軍勢下向  
アリ同九月政實誅戮セラレ諸軍凱陣ニ秀次公ハ奧  
筋ノ御仕置殘ナク仰付ラレ平泉一覽有テ後出羽最  
上ニ出テ上京シ五フ右ノ定ハ此時ノ掟ヲ中尊寺ニ  
納置タルナルヘシ  
淺野彈正少弼長政文書 十八  
中尊寺門前百姓等悉令還位耕作可仕俚聊不可有非分ノ  
儀以自然傳馬人足等ノ事申懸族維有之一切不可令引  
者也

八月十七日

淺野彈正判

按スルニ此書年号ヲ不記察スルニ天正十九年ノ秋九  
戸陣ノ時ノ丁ナルヘシ或書ニ云秀吉一統ノ初淺野  
長政京職後為執事之一員專掌政務矣又檢知關東及  
奥州之郡縣于今依其法矣

朝鮮陣御掟 九

一 唐入付御在陣中侍中閑小者何らノ子令下立ニテ左衛門守  
於有之者其原ノ事ト及中一類并お抱重立所可罷御成敗  
惟為類弟若知トシテ於其者一人ノ名成御赦免トシテ  
其海邊トモ其家人惟之者其於其者ト可為罪科事

一人足版本之事、類別雖為所控、猶以給人一念之不可、仍事  
一、遠國より馬供仕出、大軍役を乞ふ、馬供の事、以て來月、  
替り、以て御付、條上、有、一、成、其、意、得、奉、  
一、御陣、以て、御、不、得、之、田、畠、之、事、其、御、中、之、  
至、荒、置、者、其、御、中、可、以、以、法、成、敗、多、事、  
附、為、御、中、以、作、之、成、法、有、之、為、之、事、以、  
一、御、陣、以て、御、不、得、之、田、畠、之、事、其、御、中、之、  
至、荒、置、者、其、御、中、可、以、以、法、成、敗、多、事、  
附、為、御、中、以、作、之、成、法、有、之、為、之、事、以、  
一、御、陣、以て、御、不、得、之、田、畠、之、事、其、御、中、之、  
至、荒、置、者、其、御、中、可、以、以、法、成、敗、多、事、  
附、為、御、中、以、作、之、成、法、有、之、為、之、事、以、  
一、御、陣、以て、御、不、得、之、田、畠、之、事、其、御、中、之、  
至、荒、置、者、其、御、中、可、以、以、法、成、敗、多、事、  
附、為、御、中、以、作、之、成、法、有、之、為、之、事、以、

天正裁捨年正月日

御朱印

御印

愚按、元二秀吉公朝鮮陣御控中尊寺ニ納置タルル、  
中尊寺神事制札 干

札

一、毎年中尊寺神事相違有之、而、  
一、此、中、尊、寺、神、事、相、違、有、之、而、  
右、條、之、旨、堅、可、存、者、也、

寛永四年卯月十日

茂庭周防守書判

按、元二茂庭周防守延元八黄門政宗卿ノ家臣ナリ

御墨印寫

廿一

平泉領之事

一 貳費四百三拾九文

院之坊

一 壹費六百九拾之文

西谷坊

一 壹費六百六拾八文

竹下坊

右於磐井郡中尊寺村都合六費九拾文、不家附之坑、且塚並別件、  
漢源掃地勤行等不可怠慢者也、仍付如件

寬永廿一甲申年八月十四日 御黑印

平泉坊中

從東叡山之文書 共三

陸奥國平泉關山中尊寺者、從往古佛法紹隆之勝地、台宗弘  
通之淨砌也、雖然本寺未相定之間、請屬于東叡山直末、因茲

今般被召加御門下訖者、自今以後、不替本寺之下、知佛事勤  
行等、不可有怠慢旨、依 輪王寺宮一品法親王之仰、執達如  
件

寬文五年十二月五日

任心院判

圓覺院判

中尊寺

從東叡山法度條々 共三

奥州平泉關山法度條々

一 可抽天下泰平國主清寧之丹祈事

一 三季講演、並且夕々勤行、不可致懈怠事

一講演神事者於山白山神前可相勤之祈禱者經藏佛夏者於  
 一光堂可執行事  
 一寺々自佛前至道迄無油斷可致掃除事  
 一結徒黨繼連署公事沙汰仕間敷夏  
 右之條々堅可相守之旨依輪王寺一品法親王之仰執達如  
 件

延寶四年九月二十四日

見明院判  
 觀理院判

衆徒中  
 同書狀

一筆中入其山儀寺院有一宗之法武衰敗之事友一存之  
 以百漸之進處之天宗宗一之被補者不可勤以爲之金院  
 法信在成以之 孫多不各之古末之信信之成事中以之  
 宗旨之由之之之之之

九月廿四日

見羽院判  
 觀理院判

中寺寺光堂判書  
 主色判  
 徑飛判書  
 大寺判書  
 熱元院判

愚按スルニ右書年号ヲ記セズ日月前書ニ同キヲ以テ看ル寸ハ  
延寶四年ナルヲ疑ヒナシ

毛越寺寺領之事 共五

一當州之刺史大膳大夫時行兩寺巡禮之時為佛餉燈油之料  
所毛越寺者柏崎七ヶ村中尊寺者瀬原黒澤白濱三ヶ村被  
為寄附云云

一鳥羽院御願所平泉毛越寺圓隆寺六口供僧三十六町口別  
六町六口柏崎之内右心地頭四方田右衛門尉景綱父子四  
十餘年令押領彼六供近年許申之刻被改押領被附供僧畢

奉行 雜賀彌次郎

一毛越寺往古之寺領三迫三十三郷之内大荒木村神社寄進  
狀寫

敬寄進

八幡宮御神田 御こく田  
た先

松木二反

五頭天王御神田 御こく田  
た先

一段いんた先  
一段いんた先

合四段者

右神ハ人の敬三十一歳より仰て位とま一人ハ神のめく三十一歳より仰て徳  
花山院内大長大僧都御坊代三十一歳より成清寄進一奉る子孫々  
よむるまで此旨より仰て知行ありき御如件

延寶二年十二月二日

若狭中務兼藤原成清

平泉毛越寺權別當

中尊寺寺院 共

別當 一山之首長

金色院 本号竹下坊

小前澤坊

法泉院

北本坊

藥樹王院

別所坊

大德院

東谷坊

地藏院

永根坊

瑠璃光院

觀泉坊

積善院

中野坊

願成就院

池邊坊

金剛院

大林坊

真珠院

西谷坊

大長壽院

上西谷坊

釋尊院

觀智坊

觀音院

南谷坊

常住院

歡喜坊

利生院

吉祥坊

圓教院

櫻本坊

圓乘院

承仕法師行善

毛越寺寺院 共

隆藏寺

柳本坊 二下

大乘院

千手院 一本院号下坊号上三十一

常本坊

寂靜坊

感神院

池上坊

明禪院

覺城坊 一上

白王院

鳥屋崎坊

金剛院

連饒坊

慈光院

千饒坊

壽命院

山饒坊

普賢院

圓藏坊

壽德院

善正坊

善王院

千光坊

藥王院

櫻岡坊

寶積院



梅本坊<sup>下</sup> 覺性院 圓光坊 光圓院

寶全坊 福唱院 蓮乘坊 蓮乘院

承仕法師鏡全 同圓明

右中尊寺十八區承仕一人毛越寺十八區兼仕二人今於テ  
残レル所ナリ

秀衡古城 六八

秀衡ノ城址名取郡吉田村ニアリ高楯城ト云東南ニ秀衡  
丘ト云所アリ上ニ高楯<sup>館</sup>熊野権現アリ又一説ニ頼朝東征  
ノ時次軍ノ地ナリト云

伊達植宗君往年伊達ニ任玉フ茂葛西大崎ト屢合戦シ

玉ヒテ刈田柴田伊具亘理宮城黒川深谷松山等幕下ニ  
属ス其頃家臣福田駿河ヲシテ此城ヲ守ラシム

泰衡城址 六九

泰衡カ假館刈田郡中目村ニアリ古池アリ今ニ於テ泰衡  
池ト云後ニ結城七郎朝光コトニ居レリ

黒岩口 七〇

黒岩口ハ栗原郡三迫庄岩ヶ崎村ニアリ東鑑ニ文治五年  
ノ秋泰衡家臣ヲシテ鎌倉勢ヲ防カシムル慶也郷人はヲ  
黒岩館ト云中古富澤日向ト云ル者はニ居ル

一ノ野

膽澤郡ニ一ノ野ト云所アリ出羽仙北へノ海道ニ東鑑ニ泰  
衡軍勢ヲ一ノ野邊ニ置テ鎌倉勢ヲ防カシムルト云ハ此所ナル  
ヘシ又西磐井ニモ一ノ野ト云所アリ栗原迫ニ迫シ

津久毛橋

津久毛橋ハ栗原郡三迫庄平形村ニアリ橋ノ西ハ平形東ハ  
岩ヶ崎ナリ今ハ江蒲藻橋ト書ス文治ノ役ニ梶原平次景高  
此橋ニテ歌ヲ詠シト東鑑卷九ニ出

陸奥ノ勢ハ御方ニツクモ橋ワタシテカケン泰衡カ頭

郷俗ノ説ニ頼朝奥入ノ時江蒲藻ヲ集メテ此川ヲ埋メテ諸  
軍勢ヲ渡セシ故ニ斯名付シト云ハ僻トナルヘシ東鑑ニ云

ニ品經松山道到津久毛橋給云云是ヲ以テ頼朝ノ此地へ  
来ラサル前ヨリノ名ナルヲ知ルヘシ此邊舊跡多シ橋  
ノ北ニ江蒲藻山信樂寺ノ古跡アリ此地ヲ泰衡カ戰場ト  
イヘ凡東鑑ヲ以テ考ルニ泰衡カ家臣等ノ戦ヒシ地ナル  
ヘシ十三壇連架橋ノ北北四五間ヲ隔ツ所ニ古館ノ跡  
アリ上ニ壇十三アリ北ヨリ南ニ連リ竝フ其故不詳或人  
ノ云此地ハ昔ノ戰場ニシテ戦死ノ者ヲ塵ミシ墓ナリ  
不寐壇岩ヶ崎ニアリ信樂寺跡ノ北ニ古壇アリ泰衡營陣  
ノ時士卒守夜ノ所ニ鼠壇ト云ハ謬ナリ

秀衡矢立杉

此三

秀衡箭立杉ハ名取郡笠嶋村道祖神社ノ西ノ川内澤ニ有、  
昔秀衡上京ノ時此所ヲ過ケルカ路ノ傍ノ杉ニ矢ヲ射テ  
首途ヲ賀ス從者モ又各是ヲ射タリ明曆中迄其杉猶存セ  
リ圍一丈二尺アリ其頃郷人高船ヲ造ントテコレヲ伐ケ  
ルニ杉鳴動シテ仆ル板トナスニ鏃多クアリ船ニ造リテ  
海上ニ浮フルニ忽破レタリ

愚按元ニ義經記ニハ秀衡一生上京セサリシト云リイブ  
カシ樹ニ矢ヲ射立ル丁ハ昔ノ風俗也神社ノ古キ樹木  
ニ今鏃ノ残リタル者所々ニアリ賴朝東征ノ時高水寺  
ノ鎮守走湯權現ニ奉ルトテ社邊ノ槻木ニ矢ヲ射立シ

アリ是ヲ郷人賴朝矢立槻ト云其樹今ハ枯テ根ノミ残  
レリ別ニ植繼ノ木アリ此事東鑑ニ見タリ又曾我物語ニ矢立杉  
ノ木アリ又足柄ニ矢立杉アリ武道ヲ祈ル者此杉ニ矢  
ヲ射立テ手向ト歌書ニ出タリ

千塚 世

柴田郡沼邊村菘神山西南三十餘町ニ千塚アリ古墳累々  
タリ是賴朝東征ノ時戦歿ノ士卒ヲ座シ所ナリ其數多ク  
以テ千塚ト云リ今ハ半田トナル

鬼切部 世

鬼切部ハ昔賴時貞任等ト藤原登任平繁成合戦セシ地ナル

了前太平記ニ看<sub>エ</sub>タリ愚按スニ鬼切部ハ今ノ栗原郡鬼首  
ノ了ナランカ功ノ字ヲ誤リ寫シ切ノ字ト為タルニヤイ  
ブカシ同書ニ和賀郡ヲ知賀トシ本拾芥抄ニ誤東鑑ニハ加賀ト  
ナシ武家評林ニ贄柵ヲ熱柵トシ舟迫ヲ舟泊トスルノ類  
舉テ計フヘカラス鬼首ハ往昔鬼ノ首ヲ座タル故ニ村名  
トスルト云ル郷説ナリ此磐井郡ニ鬼死骸村アリ氣仙郡  
ニ越鬼来村アリ今越喜来ト書此所  
海濱鬼ノ旧跡多シ奥州觀音ノアル所多  
クハ田村ノ舊跡ニシテ鬼ノ事實アリ實ハ蝦夷ニシテ其  
容貌人ト異ニ暴虐ニシテ世人ヲ惱スニ依テ鬼ト呼来レ  
ルニヤ日本武尊田道十七代仁  
德帝ノ朝以来鎮狄按察使歷代鎮東  
補任考見

觀迹聞  
老志等ノ舊蹟多カルヘシ今其傳ヲ失ス誰カ是ヲ不惜ヤ

六月 佐藤忠信之鑑 共

秀吉公天正十八年七月十四日小田原御進發アリ先陣ハ  
松坂少將蒲生飛  
驒守ニ氏郷同十九日野州宇都宮ニ着セ玉フ此  
時徳川家ノ臣本多中務大輔忠勝ヲ召サル鑑一領ヲ忠勝  
ノ前ニ置ク秀吉公ノ宣ハク是則古ノ佐藤忠信カ鑑ナリ  
トテ奥州ヨリ獻スル所也然レ凡當時コレヲ着スヘキ者  
ヲ撰ムニ忠勝ヨリ外有ヘカラスト其勇敢ヲ大ニ稱美ナ  
サレ彼鑑ヲ恩賜アリケレハ忠勝面目ヲ施シ拜戴メ退キ  
永ク子孫ニ傳ヘテ家ノ寶トツセラレケルト本朝三國志

卷三十五ニ出

義經首 七七

鎌倉實記云義經ノ首東鑑ニ文治五年六月十三日ニ腰越ニ至ルト書ルハ傳寫ノ誤ナルヘシ四月晦日ニ討タル者六月マテ延引スヘキニ非スト友直按スニ是實記ノ作者東鑑ノ全編ヲ不讀ノ誤ナリ東鑑ニ奥州泰衡カ飛脚五月廿二日申刻ニ鎌倉ニ叅着シテ去月晦日豫州ヲ誅ス其頸ハ追テ進スヘシト言上ス鎌倉ニハ其頃鶴岡ノ塔建立有テ六月九日ハ其供養ナリケレハ義經ノ首無左右鎌倉ニ持叅スヘカラス途中ニ逗留スヘシトテ六月七日ニ飛脚ヲ

奥州ニ下サル依之ワサト延引ノ六月十三日腰越浦ニ至テ此旨ヲ鎌倉ニ言上スト云リ又鎌倉實記ニ云ルハ義經ノ首ト名ツケテ鎌倉ニ實檢ニ入シハ義經ノ身替ニ立シ杉目行信カ首也ト云リ愚按スニ首實檢ニ頼朝ヨリ腰越ヘ遣ハサレシハ和田義盛ト梶原景時也若其首ニ疑アラハ景時豈其儘ニテ打過シヤ景時性質奸佞ニノ讒言ヲ以テ恒トス况ヤ義經ハ遺恨アル人ナルヲ實記ノ說信スルニ足ズ故ニ野史ノ妄說ヲ不采メ正史ニ從フ大威徳ノ乗タル牛ノ足膝ヲ屈メタリ相傳フ義經ヲ調伏

ノ時膝ヲ折タリト也

南部戸頭武國 廿八

鎌倉實記ニ南部戸頭武國ト云者アリ是建久以前ノ丁也然ルニ建久以前奥州ノ北方ヲサシテ南部ト稱スヘキ證據ナシ是詐説ナリ今南部ト稱スル由来ヲ考ルニ文治五年頼朝卿東征ノ時甲斐國南部庄ノ住人新羅三郎義光ノ末葉南部三郎先行ニ勸賞トシ糠部數郡ヲ賜リテ領知セシム東鑑卷九ニハ南部二郎先行ト出同十五卷ニハ三郎ト出ツ三郎ノ説ヲ以テ正トスヘシ先行ハ文治五年糠部數郡ヲ領シ建久二年辛亥十二月甲斐ヨリ入部アリ其後數

十代ヲ經テ天正年中ニ秀吉公小田原征伐以後先行ノ子孫南部大膳大夫信直ノ時陸奥ノ北方十郡ヲ領知ス其總名ヲ南部ト稱セシハ此時ヨリノ丁ナルヘシ文治建久ノ頃ハ一人ノ領知ニアラサルカ故ナリ

永福寺 廿九

鎌倉志云永福寺舊跡土籠ノ北ノ方ナリ昔ニ階堂ノ跡也里俗ハ山堂氏光堂氏云田ノ中ニ礎石今尚存ス俗ニ四ツ石焼石ナト云アリ東鑑ニ文治五年十二月九日永福寺ノ事始ナリ奥州ニ於テ泰衡管領ノ精舎ヲ御覽セシメ當寺ノ華構ヲ企ラル彼梵閣等竝宇之中ニ階堂アリ大長壽院ト

号ス專ラコレヲ摸セラルニ依テ別シテ二階堂ト号ス建  
久三年十一月廿日管作已ニ其功ヲ終フ御臺所御叅ト有  
其外池ヲホリ阿彌陀堂藥師堂三重塔御願寺等建立ノ一  
アリト云云

平泉圖 四十

平泉ハ此郷ノ總名ナリ今中尊寺村平泉村ト云  
ニ分ツヲ以テ里人毛越寺ノミヲ平泉トナシテ  
平泉ノ号中尊寺ニ  
不預ト思ヘルハ誤也

今俗間ニ平泉ノ圖アリ秀衡ノ時ヲ寫セル圖ト云予是  
ヲ寫シ取テ熟覽スルニ秀衡ノ時ヲ図スルニハ非ス後世  
里人ノ語り傳ヘヲ以テ好事ノ者ノ作レル者ノイカニノ

是ヲ知トナラハ東鑑ニ中尊寺ニ堂塔四十餘宇禪房三百  
餘宇ト云毛越寺ニ堂塔四十餘宇禪房五百餘宇ト云リ然  
ルニ其圖ニ堂社ノ今ノ世ニ殘レル者ト其跡ノ間云傳ヘ  
タル者ノミヲ圖シテ東鑑ノ數ニ不合禪房モ今西寺合シテ  
三十六區殘レルノミヲ圖ス又諸士ノ宅地並ニ市井ヲモ  
圖スルト雖モ諸士ノ名ヲ不着町々ノ名ヲモ不記堂塔ノ  
アリ所ニモタガヒアリ是ヲ以テ後世ノ人ノ手ニ出ラ  
知ル若堂塔寺院古昔ノ數ニ合シ諸士ノ宅ニ其人ノ名ヲ  
記スル者アラハ予コレヲ信用セン

寛保二年壬戌歲神成ノ畫工後素カ図スル者アリ古跡ノ

今ニ存スルヲ舉テ里老ノ傳ヲ記シ疑シキヲ闕キ徴トス  
ヘキニ從フヲ採之而不用彼矣

義經辨慶等之笈 一

金華山ニ辨財天堂アリ別當ヲ大金寺ト云寺ニ義經潛行  
ノ時ノ笈アリ今世ノ製ニ異ニ又秀衡寄附ノ大般若經有

江刺郡片岡村岩谷堂ニ岩屋戸山多門寺アリ寺ニ鈴木三  
郎重家カ笈アリ

膽澤郡上葉場村稻荷山心月寺ニ亀井六郎重清カ笈アリ  
氣仙郡唐丹村山伏大學院ニ亀井六郎重清カ笈ト云ル有  
又亀井カ墓ト云ルアリイブカシ

義經守ノ舍利鎌倉明月院ノ寺寶ニ鎌倉志ニ云舍利一粒

金塔ニ入源義經守ノ舍利古河御所ヨリ納之金文紗外直

毎ハ袖ニ包テ有シヲ袖ハ古河ニ残スト云實古河同前

栗原郡三迫庄沼倉村弥陀堂ニ義經ノ馬具アリシ今ハ隻

鐙ノ殘レリ又辨慶カ笈アリ

信夫郡丸山瑠璃光山醫王寺ニ義經ノ笈アリ扉内ニ十大

弟子ノ像アリ義經ノ自畫ナリト云

神社考曰駿河國補陀落山久能寺有源義經之笛號薄墨寄

進此寺嘉祿年中回祿笛亦燒失

山城國鞍馬山義經之有太刀鐙等矣



信長記ニ信長卿永祿十一年十月攝州菟川城ニ陣ヲ居ラ  
レシ時幕下ニ属セシ近國ノ面々異國本朝ノ珍宝ヲ取々ニ  
捧ケシ内ニ古源義經一谷鐵界ガ峰ヲ落シ、時懸ラレタ  
ル鐙トテ捧ケタル人アリケリト云  
愚按スニ寺院堂社稱什寶物妖僧質巫偽設而托名惑人  
貪錢物也蓋不鮮少矣看之者可辨其真偽也

牛若殪長範 四十二  
日本事跡考曰美濃國青野原牛若東行時富賈吉次同往賊  
首長範聚徒數十人謀干野夜入吉次宿欲盜其裝牛若拔劍  
斬之死者既十餘人長範異之自把炬火右手提長刀直入牛

若挑長範雖竭力牛若輕捷也長範腕痿弄長刀遂殪吉次大  
喜俱赴奥州牛若者源義經之童名也

以下二條大概ハナリキ義經ハ二十三  
源義經之容貌 四十三

盛衰記四拾壹卷義經はいがれ條云源九郎判友義經ハ  
公色<sup>キヒキ</sup>ニ成短シ容貌優美<sup>キヒキ</sup>ト云云

源賴朝之容身 四十四

平家物語卷八征夷將軍院宣之篇云院宣の御使ハ九史生  
中原泰定多賴朝其日ハ布衣<sup>ヒキ</sup>ニ衣<sup>ヒキ</sup>爲帽子<sup>カサ</sup>之顔<sup>カサ</sup>大<sup>カサ</sup>ト云云  
容貌優美ト云云

平泉雜記卷之五

目錄

駒形嶺	一	義經之臣	二
忠信屋鋪	三	橘次井	四
南延	五	衣川歌	六
中尊寺姥杉	七	白旗大明神	八
義經廟上梁文	九	中尊平泉之說	十
關山中尊寺之號	十一	津輕人魚	十二
白山社祭禮式	十三	農民得金玉	十四
安倍家系	十五	駿河次郎	十六

此卷之五 目錄 駒形嶺 義經之臣 忠信屋鋪 橘次井 南延 衣川歌 中尊寺姥杉 白旗大明神 義經廟上梁文 中尊平泉之說 關山中尊寺之號 津輕人魚 白山社祭禮式 農民得金玉 安倍家系 駿河次郎

辨慶之氣質 十七 辨慶之筆跡 六

和漢三才圖會之說 十九 蝦夷風土考之說 二十

鹽竈鐵塔 廿一 豐田城址碑 廿二

直理經清住所 廿三 中尊毛越兩寺鐘 廿四

金史別本之說 廿五 貞任宗任詠 廿六

平泉舊跡方角里數 廿七 平泉所々清水 廿八

赤堂跡 廿九 圓隆寺燒亡 三十

北上川衣河館 卅一 美田之日 卅二

平泉雜記卷之五

平泉雜記卷之五

駒形嶺

東鑑卷之九ニ謂ル賴時カ櫻ヲ植シ駒形嶺ハ磐井郡今ノ

東山ト磐井郡ノ内北上川東ヲ東山トイフ長部山ナリ此山平泉ノ

東ニアタリテ高ク峙キ北ヨリ南ニ連リ聳ヘ峯嶺秀テ溪

谷深ク山村樹間ニ隱顯シ樵徑羊腸ヲ連ヌ北上ノ大河麓

ヲ流レテ片帆風ヲ含ミ野渡人聚テ斜陽ニ對ス南ニ烏兔

山ノ奇秀有テ一柱天ヲ擎カ如シ今所謂櫻樹無シト雖モ

實ニ平泉第一ノ眺望ナリ又此山ヲ多和志根山ト云西行

法師ノ歌アリ

陸奥玉平泉よむいひたうね山山の依りてよまのて

まはりのてつ根のりしむさくむさくむさくむさくむさく

山家集

ききもせふたうの心のさくらをむさくむさくむさくむさく

まはりのてつ根のりしむさくむさくむさくむさくむさく

東山 右ノ歌既ニ前ニ載ルト雖モ駒形峯ノ事ニアツカル故ニ

東山 再ニ爰ニアク右駒形峰ノ外ニ駒形嶽ト云ル高山封内ニ

ニケ所アリ俗ニ駒ヶ嶽ト云

膽澤郡西根村駒形岳ハ神名帳ニ所謂駒形神社ノ山上ニ

社アリ郷人總善神ト云馬頭觀音ヲ安置ス御駒山駒峯寺

ト号ス西ハ出羽仙北北方ハ南部領東南ハ仙臺領ナリ俗  
ノ神ヲソウ  
ゼン神ト云

栗原郡一迫庄沼倉村ノ駒形岳ハ神名帳ニ所謂駒形根神

社ナリ俗ニ此山須  
川嶽トモ云社ハ山上ニアリ山下ニモ小社アリ一

宮ト云磐井郡五串村ニ跨カル是ノ古歌ニ朴木ヲ詠ル栗

駒山ナリ此山北ハ仙北南ハ仙臺領也古歌多シ

六帖 陸奥の栗約心けり乃木のまくらと云ふれと君も枕人尤

大和歌後 さらばはる栗約山の朴木をむさくむさくむさくむさく

さらばはる栗約山の朴木をむさくむさくむさくむさく

さらばはる栗約山の朴木をむさくむさくむさくむさく

事無草

栗駒の松よりのいもこころとてなすり草をいひたり  
いりておとろり泊山乃まらふと種はくも色くして

屏風栗駒の人の家よ女もももらるる 義信柳  
あまする栗駒の乃夕影の秋宿ようけりてもる

愚按スニ駒形嶽相隔ツ一不遠シテニッアルヲ以テ膽  
澤栗原ヲ分タントテ栗駒ト云シヲ遂ニ和哥ニモ詠

再按スニ栗原ノ駒形岳ハ西磐井五串ニ跨リ平泉ノ  
西ニアタリ平泉ヨリ奥道二十余里ヲ隔ツ其山突兀

トシテ青空ヲ撐ヒ残雪皚々トシテ五六月ニ至ル迄  
消ル一ナシ人ヲノ胸襟ヲ涼フシ塵煩ヲ拂ハシム東  
鑑ニ東山ノ駒形嶺ノ櫻花ヲ残雪ニ比シテ四五月ニ  
至ルマデ消ル一ナシト云是墨客ノ常言也ト雖モ不  
能無疑奥地櫻花假令時節ニ後ルハト云凡豈五月ニ  
至ランヤ竊ニ疑フ當時日記ノ草稿ヲ潤色淨書スル  
者其地理ヲ不詳栗原ノ駒形ヲ誤テ東山ノ駒形ト為  
シ高岳ノ真残雪ヲ謬テ白櫻ノ擬残雪ニ混スル者カ  
東鑑ヲ閱スル片ハ全章栗原ノ駒形岳ニ不係一著明  
也ト雖モ今眺望ノ壯觀ニ依テ發疑無用ノ贅論ヲ爰

二附スル下爾リ

義經之臣

盛衰記卷三十六ニ鷲尾三郎經春江田源三弘基熊井太郎  
 忠元大内維義コレ義經ノ家臣ナリト云リ同書卷四十二  
 ニ義經ノ四天王ト云アリ鎌田藤太盛政同藤次光政此二  
 人ハ  
鎌田兵衛政  
 清カ子ナリ佐藤三郎兵衛嗣信同四郎兵衛忠信ナリ同書  
 ニ云九郎冠者義經ノ手下郎等ニハ奥州ノ佐藤三郎繼信  
 弟四郎忠信伊勢三郎義盛江田源三熊井太郎大内太郎長  
 野三郎武藏坊辨慶平家物語ニハ以上八人ノ内  
 大内長野ヲ除キ鷲尾三郎有義經記ニハ  
 小山十郎權頭兼房武藏坊辨慶片岡鈴木三郎重家同龜井

鷲尾増尾伊勢三郎義盛備前平四郎喜三太又曰根尾駿河常陸房

愚按スニ片岡八郎ヲ東鑑ニ弘經ト云又弘綱氏云盛衰

記ニ為春ト云平家物語義經記ニ經春ト云鷲尾七郎ト

云雜色駿河次郎盛衰記三十六卷ニ鷲尾三郎經春ト云

平家物語ニ義久ト云此外近世流布ノ勲功記鎌倉實記

等ノ名ヲ擧ク信用スヘキアリ不可採アリ

忠信屋敷 附坊門三郎三

佐藤忠信宅京七條坊門不動堂ノ東南ニアリ相傳フ忠信  
 京都ニ居ル時此所ニ棲リト今ニ至テ其地耕種セズ忠信  
 一人ノ男子アリ成長ノ後坊門三郎ト号ス凡武家ニ在テ

坊門ト稱スル者多クハ忠信カ裔ト雍州府志ニ出  
或曰繼信忠信ノ屋敷址本州米澤ニアリ重テ識レル人ニ  
問テ記スヘシ

橘次井

橘次ノ井京西陳五辻ノ南櫻井ノ辻子ニアリ相傳フ此所  
金賣橘次季春カ宅地ト此井大ニシテ水モ又清冷ナリ  
義經橘次カ東行ニ從フ時此所ヨリ首途スト妙心寺南門  
ノ東ニ木辻村アリ是古宦家木辻ノ領所ニメ今ニ於テ茅  
宅ノ址アリ土人木辻ヲ誤テ橘次ト為ス村中一ツノ井アリ  
又出門水ト号ス是義經首途ノ日ニ用ル所ノ井也ト云是

皆謬說ナリト雍州府志ニ出

南廷

友直東鑑ヲ考ルニ所載ノ南廷ト云ル物其重寶ナルト無  
疑ト雖モ始メ何物ナルトヲ不知書籍ニ乏シフノ博ク考  
ルト不能地僻ニメ博物ノ人ニ就テ之ヲ問ニ使ナシ後是  
ヲ沙石集大和本草和爾雅等ヲ看テ銀ナラントヲ知レリ  
東鑑ニ延庭ト書ルハ挺錠ノ字ヲ略セルトヲ知レリ泰  
衡カ庫中ヨリ出シ重寶ノ中ニ南廷百各盛金器トアレハ  
金ヨリ重キ寶ノ如シト雖モ又同書ニ沙金ノ次ニ記スル  
ヲ以テ觀ル茂ハ金ノ次ニ列スヘキ物ニメ金器ト云ルハ

在合タル金ノ鉢ヤウノ物ニ納置タルニヤ又金箔ヲ押スル  
器ナトヲ云ルニヤ予考之後ニ俗説贅辨ノ説ヲ得タリ是  
ヲ後ニ載ス參ヘ看ルヘシ 此圖ナシ 大和本草云爾雅曰銀美者鏐  
集韻或作鏐時珍云其美者曰鏐 今國俗銀之美者曰南鏐  
貝原翁ノ国俗ト云ルハ和国ヲサセリ 貝原好古和爾雅云軟挺南鏐同謂銀  
之美者銀鏐 イタミロ字 合類節用集云南鏐一名鏐鏐一名銀鏐 友直  
按スニ損軒先生今國俗銀之美者曰南鏐ト云ルヲ以テ觀ル  
氏ハ南鏐ハ日本ノ稱スル所ニノ中華ノ書ニ不出丁明也  
字彙ヲ考ルニ挺ハ他鼎切直也鏐ハ連條切白銀之美者鏐  
ハ人絹切柔銀鏐ハ徒鼎切金銀之鏐也トアリ東鑑卷五ニ

唐錦十端唐綾絹羅等百端南延三十唐墨十挺又唐錦唐綾  
南延五十ト卷九ニ南延百各盛金器卷三十二卷絹十足南  
延一箱又砂金百兩南庭十兩卷四十四ニ南延十馬一足卷四  
十六ニ南延五置銀折敷卷四十九南庭置同扇 前文ニ銀扇アリ同扇ハ  
前ノ銀扇ヲサス 又南庭二ヶ所ニ出卷五十馬並南庭五劍又生衣  
二南庭三絹三十足又劍南庭二 按スニ四十二卷ニ南庭十兩ト出テ外ニハ兩ノ字ナシ  
盛衰記卷十中宮御産ノ卷ニ御馬十二足砂金千兩南鏐  
百御劍七振御祈禱ノ御布施ナリ又卷十四伊豆守仲綱ノ  
木ノ下ト云ル馬ヲ宗盛見ント望ミ引ヨセ置テ返サス仲



綱使者ヲ以テ木ノ下還シ玉ハルヘキ由ヲ申タリケレハ  
宗盛木ノ下ヲハ惜ミテ返サス其代ト覺シクテ南籙ト云  
馬ヲ玉ハリケリ極テ白馬ナリケレハ南籙ト呼ケリト云リ  
○無住法師カ沙石集卷六ニ正直ノ人寶ヲ得タル丁ヲ載  
テ曰近年帰朝ノ僧ノ説トテ或人語リシハ宋朝ニ賤シキ  
夫婦アリ餅ヲ賣テ世ヲ渡リケリ或時道ノホトリニシテ  
餅ヲ賣ケルニ人ノ袋ヲ落シタリケルヲ見レハ銀ノ軟挺  
六アリケリト云云俗説贅辨ニ云東鑑ニ南廷ト云物有  
有贓者ニ是ヲ問其人秘傳トテ申ケルハ南廷ハ修禪寺ノ  
紙ナリ頼朝伊豆配流ノ時修禪寺ノ南庭ニ於テ此紙ヲ手

自ラ漉玉フ故ニ南庭ト名ツク秘藏ノ一ト答フ今按ル  
ニ此説珍奇也ト雖モ恐ラクハ非也修禪寺ノ紙平家物語  
ノ首<sup>ハシ</sup>五節ノ舞ノハヤシニ出タリ然レハ由来久シキヲ頼  
朝ニ始マルニ非ス東鑑ニ卷絹十疋南廷一<sup>嘉禎</sup>御甲駿河  
次郎泰村南延長井左衛門大夫泰秀<sup>三</sup>砂金百兩南庭十又  
砂金百兩南庭十兩<sup>建長四年</sup>南庭五置銀折敷<sup>八</sup>奉引出物砂金  
越後守實時南廷秋田城介泰盛<sup>正元二年</sup>此類不勝枚舉大概砂  
金トツガヒ馬絹ナド、ツガフ御引出物ヲ上ルニ二人ハ  
甲ヲ指上一人ハ修禪寺ノ紙ヲサシ上ルヲ相應ニアラス  
決シテ紙ニテハ非サルヘシ按ルニ銀ノ美ナル者ヲ南籙

ト云<sup>今出羽ノ</sup>金ノ餅ヲ鋌ト云南鐐ノ餅ト云ヲ略ノ南鋌  
ト云カ廷ハ鋌ノ偏ヲ略シテ書リ故實トナリテ廷氏書ナ  
ルヘシ東鑑進物ノ中南廷ノ外ニ銀ナシ南廷乃銀ナル丁  
ヲ知ル古キ武士ノ家ニ純銀ノ鋌一枚アリ徑リ二寸八分  
四方ニメ四ツノ角ヲ二分ヲ殺グ厚サ一分桐ノ刻印コレ有  
四ツノ角表裏ニ二ツ輪ノ内ニ桐ノ紋ノ刻アリ表ノ中ニ花降  
ノ二字淺ク彫テアリ重サ四十三匁アリ是古ノ所謂南廷  
ト云者ハ如是ナル者歟<sup>友直ユレヲ或人ニ聞ク銀ニ四品  
降其次ヲシバフキ其次ヲシワシケレト云ト語リキコレヲ  
博ク尋問テ實否ヲ決セマク欲シケレトモ寒郷其人ナシ  
故ニ姑クコトニ記シテ</sup>  
他日ノ考索ヲ俟事爾リ

衣川歌

六

まけつらちまきてんれい衣川をそらむらひけのり

此哥俗間ニ傳ヘテ人口ニ膾炙シ来レリ予一日南部根元  
記ト云ル寫本ノ書ヲ見ルニ天正十九年奥州九戸左近將  
監政實ト云者逆意ニ依テ同年六月秀吉公ノ下知トシテ  
九戸征伐ノ大將ハ蒲生氏郷其外諸軍勢下向アリ同九月  
政實誅戮セラレ諸軍凱陣アリ十月上旬氏郷八九戸ヲ發  
足シ磐井郡衣川ヲ通りケル氏糠部ヨリ召連タル千人夫  
ノ中ニテ衣川ヲ鮭ノノボルヲ見テ右ノ歌ヲ口号スケル  
此事遂ニ氏郷ニ聞エケレバ彼者ヲ召出サレヤサシクモ

仕ル者カナト稱美セラレ青銅ナト玉ハリテ是ヨリ故郷  
へ歸ルヘシト暇ヲ玉ハリ歸レリトアリ予讀之テ右ノ歌  
ノ出所ニト思ヘリ其後藻塩草ヲ見ルニ絹川ノ歌ナリ夫  
レまきのすち今日までえいせいまぬ川乃流ぬまをひけのりかん  
此哥藻塩草ニ載ス彼者人ノ吟スルヲ聞覺タルニヤ又コレヲ  
偷ミテ絹川ノ文字ヲ換テ衣川ト為シタルニヤ詩家ニモ  
三偷アリトイヘハ折ニフレテ文字ヲ換テ吟ミタルモイト  
ヤサシトヤ言ハン藻塩草ニモ其出所ヲ不記何レノ書ヨ  
リ採レルコトヲ知難シ又家ニ畜アル書籍乏シケレハ廣ク  
考ヘ索メント欲スルニ便ナシ依テ思フニ此編ノコトキ

釋說ノ片藉ニメ人ノ一覽ニ不足モ予カ如キ謗劣ノ暨ブ  
所ニハ非ス其徵ヲ取ニ暗フメ人ヲ誤ラシメンコトヲ雖然  
古来口碑ニ殘レルヲ記トバメズンバ後ノ予ニ似タルノ  
僻アル者其事ヲ尋ヌルニ便ナカラン是予カ杜撰ノ笑ヲ  
待ツ所ナリ右ノ歌モ載ルニ不及コト雖モ其来由ヲ不  
知者ノ為解惑舉之者也

中尊寺姥杉

姥杉ハ中尊寺鎮守白山宮ノ傍ニアリ此樹四丈八尺有シ  
ガ今ハ幹モ梢モ枯朽ウツホ木ト成レリ枝條少シ殘リテ  
猶綠葉ヲ存ス郷說ニ昔本州南部ノ南宗房ト云シ僧手自

植シト云近世此杉根ヲ香ト為シ香會ニ用ヒ雅玩ト為トカ  
ヤ中將吉村公道奥ト名ヲ命シ五ヒシトカヤ未知其實否南宗ハ  
本州南部ノ産ニノ康元年中ノ人ト云リ慈氏菩薩ノ下生  
ヲ待トテ鹿角郡十和田沼ニ入テ蛇ト変シ今ニ水底ニ居  
テ種々奇異ノ事多シト南部ノ故人語レリ南宗カテ予所  
聞ヲ書シテ別  
ニ一小冊  
ト為ス

白旗大明神ノ外ニ

義經ノ首平泉ヨリ泰衡カ鎌倉ニ送リタルヲ腰越宿ニテ  
義盛景時實檢ヲ遂シテ東鑑ニ出タリ其後相州白旗里  
大磯平塚ノ間馬入村ノ前ニアリニ座ミ社ヲ建テ白旗大明神ト祭レリ社今

猶アリト云一説ニハ藤澤ニ座ムト云按ルニ里ヲ白旗ト  
号セシハ首ヲ塵ミシ以後ノ名ナルニヤ辨慶カ墓モ祠前  
ニ在ト云東鑑ニハ辨慶カ首ノ事ハ不見後ニ合祭ルニヤ  
伊賀國ニ伊豫大明神ノ社アリ源義經ノ靈ヲ祭レリ  
鎌倉志云頼朝社鶴岡八幡宮ノ西方ニアリ白旗明神ト号ス  
社内ニ頼朝ノ木像尤ニ任吉右ニ聖天ヲ安ス頼家創立也  
又報恩寺ハ永和二年上杉兵部大輔能憲建立ニシテ関山ハ  
義堂ニ此寺滅ヒテ今其址アリ此寺ニモ昔白旗明神ノ社  
アリ寺滅ヒテ社モ又七ブ義堂祭白旗神文アリ其略ニ云  
應安六年次癸丑冬十一月十五日南陽山報恩護國禪寺白

旗大明神靈祠成トアリ事ハ鎌倉志ニ詳ナリ  
愚按之ニ鎌倉ノ白旗明神ハ頼朝公ヲ祭レリ頼家ノ創  
立ト云義經ハ頼朝ヨリ先ニ死スルト雖モ其白旗ト崇  
メシハ何レカ先ナルト未詳之  
平泉高館ニ義經堂アリ古來館ノ跡ニ義經ノ墳墓アリテ  
石アリ俗ニ義經腰ヲ掛テ自殺セシ石也ト云石ノ上ニ祠  
堂ヲ立ルト云天和三年癸亥歲前大守綱村君祠堂ヲ建立  
ナサシメ玉フ祠堂上梁ノ  
文次ニ載ス天和三年ヨリ五十年前ノ頃迄  
祠堂アリシト故老ノ聞傳ヘシトカヤ近世白旗大明神  
ト号ス義經甲冑ノ像アリ寶曆年中ノ造立ナリ又古キ像ヲ

再興ストモ云毛越寺  
惣持也

愚按之ニ盛衰記卷四十三云義經ハ面長シテ身短ク色  
白シテ齒出タリ身スボフシテ能鎧ヲ不着日々朝夕ニ  
一物ノ具ヲ換ユトアリ木像ノトニ就テ其容貌ヲコハニ  
載ス勲功記ニ容貌ノトヲ詳ニ記スルト雖モ我不信之  
義經廟上梁文 九  
天和三年故太守綱村君ノ御時郡司河東田長兵衛定恒平  
泉ノ衆徒ト相議シ高館義經ノ墓上ニ祠堂ヲ建立セン  
トヲ太守ニ白ス太守命之一字ヲ創立セシム其時上梁  
ノ文松島瑞巖寺通玄和尚書之

陸奥州高館者源氏義經故城也經薨後遂作荒墟天和中  
當州太守仙臺羽林綱村公家臣河東田長兵衛定恒來治諸  
郡之次登此山訪遺塵寒烟蔓艸四顧荒涼故老相傳五十年  
前此地有靈祠定恒慨然而歎曰義經者大將軍賴朝公令弟  
其軍功威名市豎街童無不知焉豈有不封尺寸地剪一莖茅  
而安厥神靈乎即與平泉衆徒共議之而白公太守命之草創  
一字以鐵瓦葺之人咸號之曰義經堂其功其德雖專歸太守  
原厥濫觴實出自郡吏定恒之善心善心豈可不獲善報乎可  
嘉可尚仍賦一偈充上梁文偈曰  
其以平等心為墓址  
靈窟新成輪奐美

山間姐豆來藻川漣漪  
君蒿悽愴如見之  
蓋代功名昨夢回  
假令四海鬪英雄  
血流漂鹵古戰場  
我有一卷了義經  
幸是猛烈大丈夫  
天龍八部常側耳  
簾簾高館城蒼翠  
勿疑台靈垂光賁  
從前汗馬總兒戲  
爭似早出離生灰  
純白蓮華捧雙址  
降伏魔軍超佛地  
大功德至奥州刺史僊臺羽林伊達英曹藤原朝臣綱村公  
天和第三癸亥年十一月七日松島山下比丘通玄達敬識  
今中尊寺村平泉村之說 十

今中尊寺村ハ平泉村ト双ビテニケ村也按スルニ中尊寺ハ清衡建立以後ノ名ニ平泉ノ内ナルベシ今ニケ村ニ分ツ後世檢地ノ時平泉村廣キニ依テ中尊寺ヲ分テ一村トナシタルニヤ古書ニ平泉ト云ルハ中尊寺ヲ分サル前ノコト見エタリ故ニ予古書ノ説ニ隨ヒ中尊寺ヲモ平泉ト書セリ今讀人可知之也

關山中尊寺之號 上

關山ノ号ハ山下ニ衣關アルニ依テ名付タルコト分明ナリ中尊寺ノ号ハ清衡奥六郡管領ノ最初ニ下野陸奥ノ境白川關ヨリ外濱ニ至ル迄廿餘分日ノ行程一町毎ニ笠卒都

ニケ行程三町ゴト作ル

婆ニ金色ノ弥陀ノ像ヲ圖繪シテ立シ此山白川關ヨリ外濱迄ノ中央ナルニ依テ山ノ頂ニ一基ノ塔ヲ立テ佛像ヲ安置シ中尊トセシコト明カナリ而説共ニ東鑑因ヲ愚按ヲ書ス東鑑ニハ衣川柵ハ安倍頼時國郡ヲ掠メ領スルノ昔家屋ヲ構トアリ前太平記ニハ衣川關ハ貞任カ曾祖父安倍忠頼六郡ヲ押領シテ以來八十餘年此城ニ居住スト云リ然ルニ續日本紀桓武帝延暦八年ノ條ニ衣川營ノコトアリ是ヲ以テ考ル時ハ衣川營ハ往古ヨリ有ル所ニメ衣川館カ衣川柵カニケ所ノ中ナルベシ頼時カ衣川柵ノ跡ト云ハ今衣川ノ川上ニアリ東鑑ニ高館ヲ衣川館ト云ルヲ以テ名迹志ニ頼

時カ衣川柵也トスルハ甚誤ナリ基成義經ノ居タル衣川  
館ト頼時ガ衣川柵ノ同所ニアラサルトハ東鑑ヲ考フル  
氏ハ分明也館ト柵トノ別ナル或説ニ今膽澤郡白鳥村ニ  
衣關ノ跡アリ其傍ニ關山明神アリ今關門宅ト云是乃昔  
ノ衣關也ト云愚按云ニ此所中尊寺ヲ隔ツト奥道有  
是ヲ以テ衣關ニアラサルヲ知ルヘシ往昔白鳥村ニモ別ニ  
關ヲ構ヘタル跡ニソ衣關ニハアラサルヘシ

津輕ノ人魚 十二

東鑑三十八ニ寶治元年五月十一日陸奥國津輕ノ海邊ニ  
大魚流寄ル其形偏イ死ニ人ノ如シ先日由比ノ海水赤色ノ

若此魚ノ死スルカ故カ三月十一日由比濱潮色変シ赤クノ  
血ノ如シ諸人群集シテ見乏ト云リ  
隨テ同シ頃奥州ノ海浦ノ波濤赤クノ紅ノ如シ此事ヲ古  
老ニ尋ラル、所ニ先規不快ノ由是ヲ申ス所謂文治五年  
ノ夏此魚ニ同ジキトアリテ泰衡誅戮セラル建仁三年ノ  
夏又出羽ノ秋田ニ流来ル左金吾頼家ノ御事アリ建保元  
年四月出現シテ同五月ニ義盛カ大軍殆ト世ノ御大事タ  
リト云同三十九卷ニ云寶治二年十一月十五日陸奥國  
留守所註シ申テ云去ル九月十日津輕海邊ニ大魚死シテ  
浮ヒ寄ル人ノ狀ノ如シト云々此事先規ニケ度也皆吉事  
ニ不アズ是ノ間留守斟酌ヲ存シ子細ヲ申サルノ處ニ風聞ノ



説ニ就テ之ヲ尋下サル

愚按之ニ史記ニ人魚ノ膏ヲ以テ燭トセシトアリ其諸  
註ノ説東鑑ノ人魚トハ別物ナリ又本草綱目鯨魚鮓魚  
ノ條ニ鯨神録徂異記ヲ引テ人魚ノ丁ヲ載ス東鑑ノ人  
魚ト同物ナルカ鯨魚モ又人魚ト云凡名ハ同クノ別物  
ナリ貝原翁ノ大和本草ニ人魚ノ丁ヲ載ス日本紀ニ卷  
ヲ引テ曰推古帝二十七年攝津國有漁夫沈罾於堀江有  
物入罾其形如兒非魚非人不知所名今按之ニ此魚本邦  
所々稀ニ有之亦人魚ノ類ナルヘシト云リ又松島天嶺  
和尚幼少ノ時人魚ヲ見ル外ヶ濱ノ漁人網ニテ取タルヲ

把へ来ル食物本草ニ引ル所ノ徂異記ニ書ル所ト些人  
差ナシ兩ノ肘ノ後ニ紅鬢長一尺有餘ナルアリ兩手ナシ  
鬢髮赤黄面色青黒ナリ女兒ノ如シ男子ニハアラス其年  
ノ頃十二三ハカリ言語セスト著ス所ノ葵南記譚ニ記ス  
白山祭禮式 三

白山權現ハ中尊寺一山ノ鎮守ナリ社内ノ宮殿高六尺程  
横モ同之奥行一尺六寸餘其後ニ焼印アリ宮殿建立德治  
三年大檀那法橋實源ト記ス神體ハ昔ヨリ秘シテ不許拜  
見之本地佛十一面觀音慈覺大師ノ作宮殿ノ外ニ安ス  
祭禮毎年四月初牛未ノ兩日ナリ牛ノ刻ニ宮殿ノ内ニ

山吹ノ枝葉共ニ長一尺程ニノ一束ヲ納ム次ニ獅子舞アリ  
リ次御一箇馬オヒトツツマ一山ノ中ニテ七歳ノ男子ヲ選ミ二七日潔  
齋ヲ為サシメ装束ヲナサシメテ腰ニ葦葉ヲ挟ム飾レル  
馬ニ乗ル口附ノ者兩人笠ノ上ニ日月ヲ造リ立テ戴ク供  
奉六人皆造花ヲ立タル笠ヲ戴ク長刀木太刀ハリスキウツキ脱沙兔ヲ持  
金堂址ヨリ乗出シ白山社前ニテ馬ヨリオリテ笠ノ造花  
ヲ四方ニ投捨ル馬ヲ急ニ牽還ス此馬嘶ク戌ハ凶也ト云  
次ニ田樂イノ胡蝶トイフ胡桃木ノ皮ヲ以テ二尺餘ニ方ニタテ綱代ヲ組平ラ  
カニシテ四邊ニシテ下ゲ上ニ造花ヲ立テ笠ノ如クニ  
頭ニ戴キ太鼓ヲ首ニカケテ敲ク者アリサシ觥ヲ持テ鳴ス者

アリ都テ八人樂屋ヨリ笛太鼓ヲ以テ打ハヤス拍子ヲ踏テ  
躍リ舞フ次ニ関口老翁ノ假面ヲ粧ヒ装束シテ山ノ縁起  
風景ヲ稱美シテ立ナカラ東西南北ニ向テ唱フ次ニ祝詞  
公家冠装束シテ幣帛ヲ以テ白山宮ニ向ヒ山ノ由来ヲ演  
テ天下泰平國家安穩五穀成就國守ノ息災ヲ祈リ當日叅  
詣ノ者迄息災福壽ヲ祈ル次ニ若女ノ舞若キ女ノ假面ヲ  
粧ヒ鈴ヲ振り扇ヲ以テ舞フ次ニ老女舞老女ノ假面ヲ粧ヒ  
腰ヲ屈メテ鈴扇ヲ以テ舞フ次ニ能數番一山ノ衆徒各其  
後ヲ勤ム

寶曆九年己卯春平泉ノ農民花館ノ正七ト云ル者田ヲ耕ス  
田畔ニ壺ノ埋タルカ現ハレ見エシヲ多年石也ト思ヒ打  
過ケルガ一日掘取テ捨ント先鋒ヲ以テ敲キ試ルニ破レ  
碎ケタリ是ヲ看レバ石ニハアラスノ壺ニ掘出ノ見ルニ  
内ニハ灰ノ如キ沙アリ沙中ニ五ト黄金トアリ五ハ周リ  
二寸程丸クシテ白ク清キト譬ヘバ荷葉上ニ水ヲ包ミ夕  
ルカ如シ金ハ枿ノ核ナトノ形ニ似テ大小アリ重ニ多餘  
厚サ三四分程色黄赤ニ壺ハ二升餘ヲ納ルヘシ蓋ハナシ  
藥ハカ、リタレモ砂肌ニ似タリ或人見テ行基焼ニト云  
ルトバ以上ノ三種乃チ國守ヘ捧ク其所ハ金雞山ノ東南ニ

シテ往昔ノ新熊野ノ社ノ址ナリ七八十年前以前迄ハ社ノ  
礎石モ残りテ有シヲ堤ヲ造ル氏土手ニ築籠タリト云リ  
堤ト云ハ郷俗耕種ニ用ル水ヲ貯フル池ヲ云土手トハ乃チ  
池ノ四邊ノ堤ノ丁ヲ云ル方言也

安倍家系 十五

東鑑ニ云安倍賴時本名ハ男子者井殿ノ盲目厨川次郎貞任  
鳥海三郎宗任境講師官照黑澤尻五郎正任白鳥八郎行任  
等也女子者アルカイチノマヘ末陪オカイチノマヘ一加イチノマヘ一乃末陪也以上  
八人男女子宅竝テ又千世童子が事ヲ載ス  
前太平記曰安倍忠賴其子忠良其子賴時初名其長男ハ早

世ス厨川次郎太夫貞任鳥海三郎太夫宗任黒澤尻四郎正  
任磐井五郎家任比浦六郎重任比與鳥七郎則任女子八直  
理經清カ妻伊具十郎永衡カ妻ナリ貞任カ子千世童子  
蟠龍子俗説辨引安倍家傳曰神武天皇未夕中國ニ入給ハ  
サル前宇麻志摩治命攝州ヲ領シ膽駒嶽ニテ十餘年相戦  
終ニ神武帝討勝タマフ爰ニ長髓彦ト云者帝ノ御兄ヲ討  
タル故ニ此時誅戮セラル彼ガ兄安日ハ東國ニ追放セラ  
レテ津輕ニ任シ卒度濱安東浦ヲ領ス三十八代齊明帝ノ  
御宇ニ蝦夷人日本ニ襲来セシニ帝安倍比羅夫ヲ將軍ト  
シテ差向ラルト雖モ每度利ヲ失ヘリ此時安日ガ末葉ニ

安東ト云者アリ比羅夫カ陣所ニ来リ告テ云我ハ是安日  
カ末葉ナリ往昔安日神武帝ノ勅勅ヲ蒙リテヨリ今ニ至  
ルマテ赦免ナシ願ハクハ先祖ノ罪ヲ赦サレ先鋒ヲ給ハ  
蝦夷ヲ討退クヘシト請望ム比羅夫コレヲ奏聞シ勅許有  
シカハ安東ヲ先鋒トシ終ニ勝リヲ得タリ比羅夫安東カ  
功ヲ賞シ安倍氏ヲ與ヘテ同姓トスユレヨリ安東安倍氏  
号シ始祖ノ名ニ通シテ安日氏書ス其後蝦夷又亂ヲ起セ  
シニ安東カ末孫致東是ヲ討テ鎮ム其賞トシテ將軍ノ号  
ヲ賜フ六十六代一條院ノ御宇ニ蝦夷襲来セシヲ致東カ  
末葉國東松前ニ到リ上道下道ヨリ向ヒテ數百人ヲ討殺シ

其魁首四人ヲ虜ニメ歸ル國東カ子頼良其子安東太郎頼  
良後ニ頼時ト改メ自ラ安陪將軍ト稱シ奥羽二州ヲ押領ス  
八男三女アリ嫡子日井ハ盲目ニ次男安東太郎良宗三男  
厨川次郎貞任四男鳥海弥三郎宗任五男境講師宮照三平法  
義經記云  
境冠者六男黒澤尻五郎正任七男重任稱号八男白鳥八郎  
龍相行任女子ハ有加一乃末陪中加一乃末陪一加一乃末陪之貞任  
ハ南部盛岡厨川ニ任シ其威強大ナリ後冷泉院ノ御宇康  
平五年源頼義義家勅ニ依テ奥州ニ發向シ頼時並貞任ヲ  
誅ス宗任ヲ虜ニス貞任カ嫡子千世壽丸陸奥話記十三ニテ  
父ト同時ニ戦死ス二男高星三歳也シヲ乳母抱キテ津輕

藤崎ニ遁レ後ニ藤崎ヲ領セリ貞任カ兄安東太郎良宗ハ  
子細有テ同罪ヲ遁レ末葉代々相續良宗高星カ子孫繁昌  
崎ナド、号ス紋ハ獅子牡丹後ニ檜扇ニ真羽ナリ元亨二  
庶子ハ鷹ノ羽ヲ用ユ或ハ雁金ヲ用ユル者モ有リ年ニ良宗カ後胤安東太郎堯勢ト云者北條高時ヲ背キケ  
ル故相摸入道楠正成ヲ遣シテ堯勢戦負テ津輕ニ退クト  
記セリ南朝記北條九代記等ニ記セリ以俗說辨廣益多田  
五代記ニハ安陪忠頼ハ人皇第八代孝元天皇ノ後胤ト記  
セリ

駿河次郎

鎌倉志曰固瀨村ハ腰越村ノ西ニ河アリ固瀨川ト云駿河

次即清重戦死ノ所也。笈焼松ノ瀬村ノ西ノ方民家ノ後竹  
藪ノ際ニアリ駿河次即清重笈ヲ焼シ所ナリ

辨慶之氣質 七

武藏坊辨慶ハ智仁勇杯蓋ノ行迹多ク義経の好色なるは度諫め  
たり奥州藩の侍ハの方と辨慶とて供いけりけり此れも皆人の  
田心とありしは蓋と計りけりは間了つ無き又太き氣色とほと奥  
まらばき由といひて好又氣色杯中とけりさすつと正一よ  
おけりいふもたろくは後倉殿の事なり。東はあまの  
義ハあまのしりてまゝして終てろくめけりまのり判殺せり  
各自言ひありしはさういふうすも兒の氣ははり實ハ如流

経落れしは關所といはく義経とを知らしれど打とめて軍功も  
あつて實ハ兄弟にせよとせは恩賞と増とも快くは是と飛守  
人の大切ありしは後よはひむとてさすも氣色と無き  
梅てん知りて國の人をけ理のま下すりてさすりて通らるるは  
平泉もしてははりの事さうく義経杯打とんと丸あつたりけり  
まの弟てんさるる處り美しき兒体お具しゆる坊もも同様り  
時刻は山と夜をすう南は管法とありて一兒ハ蕭義経は笛と嘯  
さすの衆徒の心もやうくも漸くして釋体のみけりしはさすり  
さして遊遊の事も釋義なり天性にさす勇たつるあはれおそれぬ  
のちうし難いあはれもいふせん喜ばしむの勢なり。是の如く

あつたふり事のみ多し 集義和書

辨慶筆跡 六

攝州須磨寺ノ寶物ノ中ニ辨慶カ筆跡トテ古キ制札アリ其  
文章ニ曰

此華江南處無也一枝於折盜之輩者

任天永紅葉之例伐一枝可秀一指

壽永三年二月二日

一書ニ辨慶ハ廣才ニノ智慮深シ行状ミナ人知レリ清貧ニ

シテ今ニ残レル文書多クハ鎧馬具等迄借用ルノ状也

鎌倉實記ノ作者評辨慶曰辨慶カ武勇天下後世ニ至テ童

子婦人マテ辨慶ト稱ス此亦其實ナキ丁有ヘカラス然共

義經起兵ノ初ヨリ今日ニ至テ辨慶カ勇カ武功ノ事實ヲ

記タル實録ヲ見ス博識ノ人ヲ俟テ可散疑也

和漢三才圖會之說 九

三才圖會ニ平泉中尊寺達谷ノ丁ヲ書スル丁甚誤レリ此

書作者東鑑ナトノ正史ノ說ヲ不考シテ文旨ナル回國僧

ナトノ談話ヲ聞テ書タルニヤ其誤ヲ見且正史ノ說ヲ考

ヘバ甚殘心ナルヘシ仍テ思フ予平泉實記ヲ書スル時或

人ノ話ヲ聞テ大關山ノ丁ヲ書スルトテ今宿村ヲ金森村

ト書千住寺ヲ千手寺ト書リ後行テ見ルニ今宿ハ山ノ麓

ニノ千住寺ハ山ノ嶺ナリ此誤無耶ノ關ニ無耶ノ觀音堂

アリ千住寺ト云小寺アリ予誤レルト後悔ス三才図會  
ノ作者モ定テ其誤リヲ知リテハ不可遺憾又予平泉實記  
ヲ著シテ門人橋本某ニ京へ登セケル橋本芳野屋八郎兵  
衛ニ相談シテ板行セシメ工成テ板本五部ヲ贈ル其書ヲ  
見ルニ予カ指図トハ甚違ヒ不宜手跡ニテ細字ニ書繪モ  
趣意ヲ違ヒ予カ序文モ不宜手ニテ書且橋本予ニ相談モ  
セス序文ヲ載タリ其文予カ心ニ不適<sup>か過</sup>彼是遺憾甚シト雖  
遠國ノ下ナレハ吟味ヲモ不遂捨置又セメテ此事ヲ記メ  
朋友ニ告知セント如斯那波師曾ハ播磨ノ人ニ與藏ト云  
儒者ト云今京ニ居レリトカヤ橋本カ朋友ナリ

蝦夷風土考之說 二十

蝦夷風土考ト曰義経と崇敬といふも定るるは彼土淨瑠璃  
の内ト義経幼歳の時小船ト乗ク蝦夷地ト来テ八面大王の娘ト逼ビ  
大王狩ト出トシ窺ヒ秘藏セテ虎の巻ト盗取又小船ト乗テ本邦へ  
逃奔シ大王狩ト歸ト追リ<sup>と</sup>津輕の地ト暴風ト吹戻  
サレ<sup>り</sup>ト<sup>り</sup>事ト作<sup>ら</sup>ル<sup>ル</sup>ト<sup>り</sup>或筆記ト東夷クルト<sup>り</sup>所ト  
義経の宮<sup>あり</sup>ト今ト至リテ祭息<sup>く</sup>此近郷の夷人も崇敬ト<sup>シ</sup>テ  
ま<sup>る</sup>武者<sup>が</sup>乱の時ト出<sup>る</sup>鬼ヒシト則クルハ夷人也ト雖も尋訪  
<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>曾テ其又鬼ヒシガ村ハサルト<sup>り</sup>所ト<sup>り</sup>山中ト鬼ヒシガ住ト  
岩窟<sup>あり</sup>ト<sup>り</sup>所ト<sup>り</sup>義経の宮ハ<sup>あり</sup>ト<sup>り</sup>又蝦夷地六條の間ト



り所は辨慶崎といふ所あり義経是より北高麗へ渡りたりと  
云ふもこれ等證跡もあり又東夷は鍬サキといふ物あり義経の  
鍬形といふ寶物あり崇敬の夷もこれありといふれどもこれあり  
源公の魁と云ふべき明徴もあり唯土俗のいひありりる夷といふ  
古昔奥羽合戦の時敗績の士卒多く夷へ奔竄しりる夷と欺  
き英雄の名を借て威權と張るるも有いべし當今夷土は兵具  
の有は本邦より渡り物ありりるや右敗卒といふ兵器は殘り  
いふくハサキとも鍬の形に容るる廻り巴と彫刻す即本邦の  
鍬の柄無物なればこそ松前の人鍬サキといひありりるは又蝦夷に  
造作よりりる曾てカラフトより渡るちんといふ此器倒懸ともいふ

兜の整形は体といふ故に源公は整形と附會したる妄説といふ  
ゆゑも夷俗の崇敬神佛に等し此土稀なる物ゆゑ家藏乃夷に  
深く秘する珍重も源公の事と蝦夷言よりキクルといふ此土淨瑠  
璃何れの時如何しと始りりるや此文句一々翻譯するは夷の情状  
とありりる

右蝦夷風土考ニ載ス風土考ハ紙數十四五張有テ松前  
ノコトヲ詳ニ記セリ寶曆二年壬申ノ頃ノ作也誰人ノ作  
ナルコトヲ不知寫本ナリ

鹽竈鐵塔

塔燈 九一 大槻本三ツリ甚叢平ニナシ

鹽竈大明神樓門ノ西ニ藤原秀衡カ三男泉三郎忠衡奉納

鐵塔アリ扉ノ上ニ日月ヲスカス文字高ク淳字ニ鑄付  
奉寄進

文治三年七月十日和泉三郎忠衡敬白

カクノ如ク左右ノ扉ニアリ

豐田城趾碑

此地也東西五十七步南北三十九步在昔且理權太夫經清  
所城也經清戰死平泉之役以其子權太郎清衡有勤王之勲  
乃封與之六郡復屋之當時北上川在城之邊浮梁之稱今存  
東北有高水寺址東南有鎮岡祠白旗池俱事詳封内風土記  
多歷年所人不知之立碑以傳焉

安永三年四月十五日

藩儒 田邊希元 撰

江戸 三井親和 書

江刺郡餅田邑人建之

コレ以下其本ニテリ觀本ニナシ

愚按スルニ且理權太夫經清ハ且理郡ヲ領シ氏トス其地

ニ居住スルナルヘシ安倍賴時カ女ヲ娶ル貞任ニ與ノ

康平五年賴義將軍ニ誅セラレ經清死後其妻ヲ清原武

則妻トス懷中ニ二歳ノ子アリ藤原清衡是也武則是ヲ

養育ス後ニ將軍三郎武衡同四郎家衡ヲ産ム是清衡ニ

異種同母ノ弟也

一説ニ荒川太郎武貞經清カ妻ヲ妻ト  
ナスト云ハ誤ナルヘシ將軍三郎同四

即ト名付ルヲ以テ考レハ武則カ妻トスル清衡ハ成長  
ト疑ナシ武則此時鎮守府將軍ナレバナリ  
後出羽ニ任ス義家將軍永保三年八月奥州下向ノ時  
清衡出羽ヨリ出迎奉ル其後義家武衡家衡ト合戦ノ片  
清衡一族ヲ引卒シ出羽ヨリ出張シ義家ニ加勢シ武衡  
家衡ヲ伐亡ス寛治六年義家清衡ヲ奥州ノ目代ニ残シ  
置キ帰洛ノ時奏聞ノ出羽陸奥ノ押領使トシ鎮守府將  
軍ヲ兼シム貞任カ領セシ奥六郡ヲ領知ノ江刺郡豊田  
ノ館ニ居住シ兩國十七万騎ノ貫至タリ嘉保年中<sub>東鑑</sub>  
<sub>保ト云ルハ</sub>誤ナルヘシ<sub>二康</sub>豊田ノ館ヲ磐井郡平泉ニウツシテ奥ノ御  
館ト稱ス

豊田縣志

高水寺ハ人王四十八代稱徳天皇勅願ニノ長一丈ノ觀  
世音ヲ諸國ニ安置シ玉ヲ听ノ隨一也清衡走湯權現大  
道祖ヲ勸請ノ鎮守トナス山上ニ清泉アリ寺ヨリ高キ  
ト數丈故ニ高水寺ト云

豊田ノ館ニモ又高水寺ノ舊跡アリ清衡志和郡高水寺  
ノ觀音ヲ移シテ安置セル故ニ高水寺ト号スルカ其後  
ヲ又舊地ニ移セルニヤ今高水寺南部盛岡ニ移セリ觀  
音ハ舊地ニアリ

陳罔蜂社ハ頼義將軍ノ陣場ニ其所ニ八幡宮ヲ建立ス  
故ニ土民ハノ社ト稱セシト云東鑑ニ蜂ノ字ヲ書シハ

誤ト南部ノ老人ノ言也頼朝卿モ此陳ケ岡ニ逗留シ  
至<sub>レ</sub>東鑑ニ見<sub>ユ</sub>タリ碑文ニ鎮ケ岡ト書ルハ南部ノ陳  
ケ岡トハ別所ナランカ

清衡カ生レシ康平四年ヨリ清衡カ陸奥出羽押領使兼  
鎮守府將軍トナリシ寛治六年マテ三十二年也嘉保年  
中ニ豊田ノ館ヲ磐井郡平泉ニ移セリ嘉保ハ四ケ年ニテ  
改元ナレバ四ケ年ノ内ナルヘシ

且理經清任所

此條甚難キテリ大槻キニシ

且理權太夫經清ハ秀衡ノ祖父清衡ノ父ニテ安陪頼時カ督  
ナリ伊具十郎永衡モ同頼時カ督ナリ此兩人頼義將軍貞

任ト合戦ノ時表ニハ將軍ニ加勢スト雖モ心底貞任ニ同  
意スルカ故ニ頼義將軍ニ誅セラル

愚按<sub>ル</sub>ニ伊具且理兩郡相並テ貞任カ衣河館ヨリ西南  
三日程ヲ隔ツ經清永衡伊具且理ヲ氏トスル氏ハ此郡  
ヲ領シテ住所トスルナルヘシ

中尊毛越兩寺鐘 古

中尊寺毛越寺其外鐘樓ノ跡ト稱スル所處々ニ有ト雖モ  
鐘ハ有<sub>リ</sub>無<sub>シ</sub>世遠クシテ失タル成ヘシ亦圓隆寺ノ後ノ  
高山ヲ鐘カ嶽ト云昔此嶺ニ鐘ヲ掛テ兩寺ノ僧徒集會ノ  
時鳴シケルト云リ又一説ニ軍備ノ為ニ凡云此鐘モ今ハ無シ

或說ニ仙臺虛空藏堂ニ今有<sup>レ</sup>於ノ鐘平泉ヨリ出夕リ下  
云此說虛實信シ難シ<sup>レ</sup>此鐘ハ七十三代堀河帝<sup>ノ</sup>御宇清衡中尊  
中尊寺ニ鐘アリ此鐘ハ七十三代堀河帝<sup>ノ</sup>御宇清衡中尊  
ノ堂社寺院建立ノ後二百三十三<sup>ノ</sup>年ヲ經テ九十六代  
光嚴帝ノ延元二年堂社炎上ノ後<sup>ハ</sup>經藏光堂七<sup>ノ</sup>年ヲ過テ  
九十七代光明帝ノ康永二年癸未賴榮法師<sup>ノ</sup>經藏別當是ヲ  
造<sup>レ</sup>リ序銘アリ前ニ詳ニ載ス<sup>レ</sup>且<sup>レ</sup>數<sup>レ</sup>ハ六十八<sup>ノ</sup>也  
和漢三才圖會ニ此鐘櫻河ヨリ出セリト云ハ虛說ナリ  
圖會ノ書中尊平泉ノ丁ヲ書スル都テ妄說多シ不足採  
康永二年ヨリ今安永九年庚子ニ至テ四百三十八年也

毛越寺常行堂ニ今鐘アリ寶永年中里人ノ建立也

金史別本之說 廿五

範車國大將軍源光録義鎮者日東陸華仙權冠者義行子也  
始入新靺鞨部爲千戶邦判事身長六尺七寸性溫和而勇猛  
才思甲諸部外夷多隨拜入學館辨禮義後遷咸京録事章宗  
詔轉光録大夫累任大將軍久守範車城押北方往昔權冠者  
東小洋藩君章宗顧厚賞定總軍曹事宜合入北曠不日破蘓  
敵得印府翻來屬幕下築範車護焉頃侵北天渡龍海得一島  
山河麗奇而悉金玉也民知煎靈草少食五穀屠生肉甚嫌故  
無邪煩老仙伊香保行辰行本命法儀相無異怪德勝故人義

行歸趣尊敬得長壽後遊中華隱顯更不定

山右鎌倉實記ニ所載ニ余先ニ此書ノ中ニ此文ヲ譯シテ  
論ヲ加フ今又本文ヲ見ニテ欲スル人ノ為ニ書干此

東山 貞任宗任詠 共 共ニナシ概ニアリ

衣川の柵敗きて貞任宗任等東北とて走行く時義家おひけ  
らうらう 衣川柵をほころひよけと吟どたよそ貞任

ちり京都よめとるるとれ着る梅の花と手折る是はゆりまを  
あまの梅は花とるるとれとる人ちるるとりやんと昔はく人々

詞もなると帰とけり

右前太平記ニ見タリ世ニ貞任等ハ情モ知ラ又荒夷ノ

ヤウニ思ヘ凡如此和哥ノ道ヲモ心懸タリト見タリ

平泉舊蹟方角里數 共七

予先ニ平泉舊跡志ヲ著ス其方角里數ヲ不記然ルニ大槻  
清雄悉ク舊跡ノ方角町數ヲ尋記テ以テ後世ノ遺忘ニ備フ  
其志深切也ト云フ余則請之舊跡志ノ本末ニ附シ又雜  
記ニ附シテ同志ノ人ニ與フ其間數里數ハ圓隆寺池ノ南  
大門ノ入口東南ノ角ノ礎石ヨリ四方四隅ニ計リ始ムト知  
ヘキナリ

○金堂 圓隆寺ト号ス子ノ五分  
間數六十五間三尺

鐘樓 亥ノ八分  
間數四十八間

鼓樓 丑ノ二分間  
教四十八間

辨天 子ノ二分間  
二十間

嘉祥寺 亥ノ二分間  
七十三間三尺

經藏 亥ノ三分間  
五十八間五尺

法華堂 丑ノ五分間  
七十七間

池中嶋辨天堂 子ノ九分間  
一丁三十五間

日光社 丑ノ六分間  
四丁三十分

鈴掛森 子ノ三分間  
十八丁

金峯山 北方鎮守子ノ  
九分五丁四十五間

義經館 丑ノ二分間  
八丁

文殊樓 子ノ五分間  
教五十二間

大黑天 子ノ八分間  
二十間

講堂 亥ノ八分間  
八十間

常行堂 丑ノ八分間  
七十四間

聖山堂 卯ノ一分間  
五十二間

獨鈷水 子ノ四分間  
一丁五十九間

千手觀音堂 子ノ七分間  
四丁九分

金雞山 子ノ八分間  
六丁五十分

新熊野 北方鎮守丑ノ  
五分五丁九分

大阿彌陀堂 号觀自在王院  
丑ノ七分三十五間

小阿彌陀堂 丑ノ九分間  
二丁十五間

阿彌陀鐘樓 寅ノ六分間  
二丁九分

梵字池新御堂 号無量光院  
丑ノ九分七丁

猫間淵 寅ノ三分間  
八丁九分

日吉白山社 東方鎮守  
寅ノ四分五丁八分

伽羅御所 寅ノ七分間  
七丁八分

舞鶴池鐵塔 寅ノ七分間  
二丁五十分

五重塔 卯ノ五分間  
二丁四十三間

時太鼓 卯辰ノ一分間  
一丁廿五間

正八幡社 己ノ六分間  
一丁九分

基衡室墓 丑ノ八分間  
二丁卅間

貴船社 丑ノ九分間  
四丁十五間

三重寶塔 寅ノ一分間  
七丁九分

柳御所 丑ノ九分間  
八丁九分

和泉酒 寅ノ九分間  
七丁八分

新御堂鐘樓 寅ノ一分間  
七丁九分

普賢堂 寅ノ七分間  
二丁七分

車宿 卯ノ六分間  
五丁五十分

粧坂 巳ノ二分間  
四丁一分

國衡屋敷 己ノ三分間  
一丁五十分

○隆衡屋鋪 己ノ九分 二丁五十二間

○祇園社 南方鎮守己ノ七分十丁廿六間

○春日社 午ノ九分 六丁廿六間

○藥師堂 午ノ七分 十丁六間

○鐘山伊豆權現 未ノ三分 十丁廿六間

○不動堂 午未ノ八間 七丁廿八間

○櫻清水白山社 未ノ五分 九丁四十六間

○大日堂 未ノ九分 八丁四十八間

○稻荷社 西方鎮守申ノ六分五丁廿間

○護摩堂 申ノ四分 一丁四十間

○兒ヶ澤 午ノ五分 二丁

○王子諸社 己ノ六分 十丁五十四間

○勅使屋鋪 未ノ二分 九丁卅間

○諏訪社 未ノ八分 九丁四十間

○吉祥堂 未ノ三分 六丁十間

○西明寺洞 未ノ八分 十一丁十七間

○北野天神社 未ノ九分 八丁五十六間

○慈覺堂 未ノ九分 八丁四十六間

○文殊堂 申ノ六分 三丁二間

○鐘樓 申ノ四分 一丁四十二間

○鐘ヶ嶽 亥ノ六分 十六丁

○葛西屋敷跡 金雞山ノ南北ニ在

○比丘尼寺跡 達谷道ノ南 小金沢西ニ在

右清雄カ書スル所舊跡ノ數六十三ヶ所毛越寺ハ嘉祿

二年丙戌歲十一月八日ニ堂塔焼凶スト東鑑脱漏ニ出

タリ諸堂礎石今ニ残レリ觀自在王院ハ天正元年二月

八日ニ焼亡スト云傳ヘリ無量光院ハ泰衡滅亡ノ時放

火スト一書ニ出タリ愚按 元ニ東鑑ニ平泉館炎上ノ後

賴朝卿無量光院巡覽ノ丁アリ此院ノ頽廢ハ其後ノ年

曆ニ係ルヘシ其外ノ諸堂頽廢スル者礎石ノ残レル有

○瓜破清水 金雞山下ニアリ

○三十三間堂 今熊野ニ並ブ

○此依書大觀本ニミナリ

○此依書大觀本ニミナリ



又不残モ多シ秀衡ノ居館ハ文治五年八月廿一日泰衡放  
火ノ奥ノ方へ逃行ト東鑑ニ出タリ諸堂並ニ居館ノ跡今  
ハ田圃ト成又人居ト成テ其界分明ナラスノ尋得ヘカラ  
サルモ多シ

摩多羅神ハ昔堂焼亡以後天神社内ニ安置シケルカ享保  
年中昔ノ常行堂ノ地ニ堂建立シ又移セリ今ノ堂ハ昔ノ  
堂跡ヨリ三四間西へ寄レリト云

觀自在王院大阿彌陀堂ト云リハ堂焼凶ノ後佛像ヲ他所へ移シ置  
ケルカ昔ノ堂跡ニ堂ヲ建立シ佛像ヲ安置ス

中尊寺ハ堂塔寺院建武四年丁丑悉ク焼亡ス經堂金色堂

ノ二字ハ火災ノ難ヲ遁レテ残レリ其後堂社ヲ營ムト雖モ  
昔ノ半ニモ足ラズ然ルニ此地ノ堂社寺院其他相隔タラ  
サルカ故ニ方角是又不及記矣

コレヨリ峯ト蓋キニシ  
平泉所々清水 共八

一 按察使清水 勅使按察使中納言顯家郷下向ノ時用ヒタル  
水也故ニ按察使清水ト云中尊寺々内ニアリ

一 破瓜泉 ツリヤ 金雞山下ニアリ昔此水ニ瓜ヲ浸スニ水ノ寒  
冷ニ依テ瓜破裂スルカ故ニ名付タリ

一 鑿通清水 キリトホシ 圓隆寺跡ノ後ニアリ獨鈷水ト号ス慈覺大師  
加持水也ト云

一 櫻清水 鏡山ノ下ニアリ昔清水ノ邊ニ櫻ノ並木アリ故  
ニ名ツク今櫻残レルアリ  
一 酒之泉 平泉館跡ノ南ニアリ今海道ノ東ニ昔三代ノ時  
酒泉ノ湧出シ所ナリト云其址今ニ在ル  
愚按スニ醴泉ノ甘味ヲ稱ノ斯名付タルニヤ漢ノ地理  
志ニ酒泉郡アリ金泉味如酒ト云リ又日本養老瀑泉ノ  
事實アリ是等ノ類ナルニヤ再按スニ此所平地ニシテ  
泉アリ此郷ヲ平泉ト号セシハ是ニ本ツケルニヤ  
秀衡カ三男和泉三郎忠衡カ宅泉屋ノ東ニ在リ東鑑ニ  
云リ其所今何レノ地ナルコトヲ不知此邊ノ土ナルニヤ

赤堂跡

堂跡中尊坂ノ上ノ口道ヲ隔テ下ニ在リ此堂ノ本尊丈六ノ  
阿弥陀藥師昔堂頽廢ノ後山上金色堂ノ内椽ニ移シ置ケ  
ルカ寶曆九年金色堂ノ東經堂ノ南ニ當リ堂ヲ建立シ同  
年八月朔日本尊ヲ移シ安置ス

愚按スニ赤ハ關迦ノ字ナルヘシ關迦ハ水ノ梵語也昔  
慈堂塔寺院全盛ノ時禪房三百其外山上山下人家多キ時  
此地ニ大キ成井ヲ掘リ其水ヲ山上山下ニ汲用タル故ニ  
關迦堂ト名付シニヤ今蛇足ヲ添ルノ笑ヲ顧スシテ書  
之事爾

圓隆寺燒亡

三十一

東鑑脫漏曰嘉祿二年丙戌十一月八日己未陸奥國平泉丹  
寺燒亡于時有此災之由告巡鎌倉中者有之可謂不思議  
然後日天令風聞彼時刻也是藤原清衡建立精舎也靈場於  
莊嚴者吾朝無双之右大將軍文治五年奥州征伐之次令順  
禮給之後殊有信仰云云

愚按此二丹ノ字ハ圓ノ字ノ傳寫ノ誤ニ藤原清衡ハ中  
尊寺ヲ建立ス圓隆寺等ヲ建立スルト云ハ誤ニ其子基  
衡ハ毛越寺ニ於テ諸堂ヲ創立ス金堂ヲ圓隆寺ト号ス  
嘉祥寺ハ基衡未其功ヲ不終ノ卒去ス故ニ秀衡父カ志

ヲ繼テ其功ヲ終フ又燒亡ノ日其丁ヲ鎌倉中ニ告廻ラ  
ス者アリト云ルハ不思議ナリ世ニ所謂天狗ノ所為カ  
不可知也

北上川衣河館 三十一

北上川ハ昔ノ地圖ヲ見侍リシニ伊澤郡塚上ヨリ東山ノ  
山際ヲ南方ヘ直ニ流レシナリ又衣河館ハ和年中高五  
十間東西百間餘南北二十一間一説ニ東西四百間余ト  
南北百三十間余ト云リ  
云リ此時衣川ハ此館ノ際ヲ廻リ流レテ北上川ニ入  
秀衡ノ時西行法師平泉ニ来リテ衣川館ヲ見テヨメル

十月十二日平泉より衣川館へ至りて衣川館を見たりて秀衡の事

脱漏

ゆれりて流に注ぐ衣川不<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>てま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の  
ま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の  
居<sub>レ</sub>る所のま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の  
ありは少

山家集

いづれもた<sub>レ</sub>るも志<sub>レ</sub>てま<sub>レ</sub>るも衣川不<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所のま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の

松辺河より事<sub>レ</sub>成衣川流<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所のま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の

衣川河より事<sub>レ</sub>成衣川流<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所のま<sub>レ</sub>り向<sub>レ</sub>て居<sub>レ</sub>る所の

此哥ヲ以テ見ル氏ハ衣川ハ昔ヨリ館ノ際ヲ廻リ流レテ  
北上川ニ入リシ也

愚按<sub>レ</sub>ルニ北上川天和ノ頃ヨリ漸々ニ洪水ニテ數百間

西ニ流ル又衣川ハ中尊寺ノ下ヨリ數十間東ニ流レテ  
北上川ニ落ツ西川一ツニナリテ今ハ衣川館ノ下ヲ廻リ  
流レテ東南ノ方ヘ流下ル館ハ度々ノ洪水ニ崩レ欠テ  
上ハ半ニモ足ラス甚狭シ館ノ上西ノ方ニ義經堂アリ  
既<sub>ニ</sub>前<sub>ニ</sub>詳<sub>ニ</sub>書<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub> 天和三年河東田氏太守公ニ告テ造立ノ時瓦  
葺ナリシカ今安永九年庚子ニ至テ九十八年ニシテ堂  
零落シテ同年再興セリ堂中ニ安スル所ノ義經ノ木像ハ  
寶曆年中ノ建立ニ義經堂ノ西ノ高キ所ニ亭ノ跡トモ  
之ツベキ所アリ東ニ後世新山權現ノ社ヲ建ツ此里ノ  
鎮守ナルニヨリテ也又館ノ少シ下ニ馬乘馬場トモ云



へき所アリ此館ノ門昔ハ西方ニ在ケルニヤ南方ニ在  
 ケルニヤ分明ナラス義經ノ家臣亀井鈴木増尾等ノ舊  
 蹟館ノ西ニアリ討死ノ所ナルヘシト云又世俗ニ辨慶  
 立往生ノ所ト云ハ衣川ヨリ北上ニ流レ落ル所ニアリ  
 館モ昔ニハ甚異ナリ故ニ後ノ人ニ知ラシメン為ニ是  
 ヲ書ク又後世ニ至リテ今ノ時ニモ変レルト有ベシ  
 此館ニ民部少輔基成ヲ任セシメシト又源義經ヲモ任  
 セシメシト予平泉實記ニ詳ニ記ス此館ノ西ノ方海  
 道ノ少シ上ノ山ヨリ錢ヲ掘出セシトアリ元禄年中ノ

事ニヤ其頃停止シテ今掘ラセズ

平泉雜記卷之五 大尾

平泉縣志卷之五  
在分  
在

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五

平泉縣志卷之五



明治九年五月磐井縣抄寄

